

文、分、異聞

原田ゆう

時

一九六三（昭和三十八）年十一月二十日 午後八時過ぎ

場所

文学座アトリエ ホール

登場人物

第一期研究生

シン

ミノリ

タダヒコ

チホ

キヨウコ

ダイゴ

マユミ

第二期研究生

ヤギ

トオル

ケイスケ

カズコ

文学座アトリエホール。十一月二十六日からアトリエで行われる『城』の舞台装置が組まれている。上手下手の奥に袖幕が一枚ずつ吊られている。観客席はまだ組まれておらず、観客席エリアにはスタッフが使用する長机や椅子が置かれている。下手前に扉があつてホールのメインの出口になっている。

『城』で使用される小道具などは端に寄せられ、十脚ほどの椅子が舞台のアクティヴエリア（『城』のアクティヴエリア）に楕円状に並べられていて、タダヒコ、シン、ミノリ、チホ、キョウコ、トオル、ダイゴ、カズコ、ヤギ、ケイスケが座っている。マユミは一人離れた場所に座り、彼らを見ている。

シンが立ち上がる。

シン 上演中止じゃない、上演保留だよ。われわれ文学座は芸術至上主義を掲げてこれまでやってきた。思想的に中道であることをここまで貫き通してきた。時代のムードも考慮すると、『喜びの琴』の上演の可否はもつと話し合う時間が必要だよ。我々がこういう思想問題にぶつかるのは初めてだからね。

ミノリ でも、企画委員会で、

シン 分かっているよ、そういうことは委員会で議論されなかったのかと言いたいだろう？ 分かるよ、北見の言おうとしていることはその通りだ。

ミノリ この戯曲が孕んでいる、

シン もちろんもちろん、この戯曲が孕んでいる思想性政治性について徹底的に議論した、左翼批判とも受け取られる可能性はあるけれども、作品の本質は、人間を問題にしている、信頼と裏切りをモチーフにしているのはこれまでの三島作品と変わらない、そう結論して上演を決めたわけだ。

ミノリ でも、その決定からもう、

シン うん、委員会の決定からもう十日ほど経って、来年一月の本番に向けて既に稽古も始まっている。なのに、どうして上演の可否を問うのかと言いたんだらう？

ミノリ それにしたって総務が、

シン そうだなそうだな、阿部さんが「切符を売らない！」といきなり切り出すもんだから、私も驚いてしまったよ。もう一度総務の意見を整理しよう。阿部さん、もう一回頼むよ、今度は落ち着いて。

タダヒコ ですから！ 総務としては『喜びの琴』は上演中止してもらいたいです！

この作品は松川事件を連想させます！ 長い裁判の結果、つい二ヶ月前に列車転覆の犯人と疑われた労働組合員二十人全員に無罪判決が下ったんです、労働組合員は無罪だったんですよ！ この作品は松川事件を思わせる列車転覆のシーンが描かれている、それが左翼分子による犯行となっている！ こんな描かれ方、労演に喧嘩を売っているとしか思えません！ 労演がこんな芝居を買うのでしょうか！ もう既に文学座さんの公演ですからと作品の内容を知らずに契約をしてくれている団体もあるんです！ 地方公演なんて労演に頼らずに集客は望めませんよ！ どう説明しろと言うんですか！ これを機にうちの作品が敬遠されるようになってもいいんですか！ それにNHKがテレビ中継

で買うと言ってきてくれたのに難色を示してもいるんです！

シン 阿部さん、もう少し、ね、落ち着いて。

タダヒコ 私からは以上です。

シン ……。宮本さん、総務部は他に伝えるべきことはある？

ヤギ 総務の中にはこんな気持ちの悪い芝居を正月早々に売りたくもないという声もあります。

トオル そんな言い方はないでしょう、下品ですよ。

ヤギ 作品が下品だから仕方がないでしょう。

トオル この作品も三島さんらしい格式のある言葉で書かれています。

ヤギ (そっぽを向く)

シン 総務は上演中止を訴えているけれども、私は上演保留が適当だと思う。『喜びの琴』は正月公演にはふさわしくない。三島さんの作品だって『鹿鳴館』『熱帯樹』を正月公演としてやってきている、反響も大きかった。ただ今回の『喜びの琴』はやはり正月公演としては地味だ、今年は劇団雲への脱退騒動もあって、座内の雰囲気落ち込んでる。それを吹き飛ばすかのような絢爛とした作品を書いてもらいたかったんだよ。強調しておきたいからもう一度言っておくけど、私は上演中止という選択肢はないと思ってる、上演保留だ。

タダヒコ 問題は経済的基盤をどうするかです。劇団雲に脱退したメンバーにはテレビや映画で売れている人が多くて、そのマネージメント料が座の運営を支えていたのは、皆さんもご存知でしょう。でも、そういう売れっ子がなくなったわけだから、労演に買ってもらおうという経済的基盤に移そうとしているんです。労演があんなに大きな組織になってしまうと、こちらの「観てほしい」ものとあちらの「観たい」ものの比重がどうしても「観たい」方に寄らざるを得なくなる。杉村さんが出演されていないからちょっと、なんて言われたりもする。

トオル じゃあ、杉村さん主演の労働者万歳の芝居を打てとでも？

タダヒコ そんな極端なもの望んじゃいませんよ！

ヤギ 総務部がとつても疲弊してるのに、あなた方はまったく気にかけないじゃない。

トオル 労演との交渉は総務の仕事でしょう。こちらにだって作品を産む苦しみがある、気にかけてくれますか？

ヤギ (トオルを睨む)

トオル 『喜びの琴』を初めて読んだ時、僕は松川事件のことを書いているとは思わなかったんです。実際、出演者の多くが僕と同じで松川事件を連想しなかったと言っています。三島さんもフィクションだと言ってるし、演出者として、この作品の僕の捉え方は、あくまでも風俗劇の手法をかりた観念劇です。思想劇でも政治劇でも決してない。出演者のみんなもそれに同意してくれています。

シン でも議論が続いて稽古がはかどらない状態なんだろう？

トオル それは稽古が始まって三日間ぐらいのことです。どうしても気になるシーンがあると北村が言うので、三島さんに稽古に来てもらって説明をお願いしたんです。それで北村は納得したと思うんだけど、そうだろうか？

ケイスケ (小さく頷く)

シン 北村、本当に納得しているのか？
ケイスケ ……。

ミノリ (挙手する) いいですか？

シン 北見、どうぞ。

ミノリ 左翼批判に受け取られるからと上演を止めようとしている人達に聞きたい。過剰な思想性や政治性からは目を逸らすのが、我々文学座の掲げた芸術至上主義なんですか？ 俺は違うと思う。芸術的に優れた作品ならば、右だろうと左だろうと、思想を越えた人間の本質を表現できるはずです。『喜びの琴』はその可能性を持った作品です、予定通り、一月に上演すべきですよ。

シン 一月の上演は無理だろう。

カズコ 私も上演に賛成です。松川事件については私にはもう終わった事件で、誰かの指摘があつて、ああ、そうなのねっと思つたくらい。初稿でははっきりと共産党と書いてあつた箇所は、稽古に入った段階で直されていたから、三島さんも少しやり過ぎたと思つたんでしょう。

チホ 私もいいかしら？

シン はい。杉村さん、『喜びの琴』は読んでいただけました？

チホ ええ、そりゃ読みましたよ。昨日、中国から長岡さんと帰ってきたばかりというのにあなたがうちにいらして、読んで今日の総会に出席してくれてあんなに強く言うんですから。

シン お疲れのところを申し訳なかつたのですが。

チホ いいえ。でもね、余計にぐつたりしてしまいましたよ。本当に困つた、この戯曲を上演したとして、もう少しまくいかなかつたら、文学座も私もここでおしまいになつてしまふんじゃないかしら。だって、ほら、これね、松川事件を思い起こさない人はいないでしょう、松浦さんと夏子さんが思い出さなかつたなんて言つたけど、驚いちゃつたわよ。長い間、日本中がずつと関心を持つていたことよ、それでみんな無罪になつてよかつたって安堵していたところだったのに、この作品は判決をひっくり返すような書かれ方してるでしょう。嫌な気持ち、本当に嫌な気持ち。三島さんの個人的な思いに付き合わされてるようで、どうしても私には……。労演が買つてくれない、NHKが買つてくれない、これは大問題よ。団体で切符が売れずにそれぞれが手売りする苦労といつたら、よくよく身に染みているの、昔からいる人達は。切符をさばく時間があれば稽古をしたい、舞台に立ちたい、役者とはそういうものよ。

少しの沈黙。

キョウコ 私、これ、三島さんが文学座に仕掛けた踏み絵じゃないかと思うの。

シン 踏み絵？

キョウコ そう。そう思わない？ 「思想」っていう絵を政治的に無知な私達に踏んでみると突きつけてきたのよ。三島さんは一般の人々に流れる左翼ムードが文学座にも浸透していくのを嫌がつてるんだろうね。それで思想的に中道をいくつていう私達の覚悟を試してる、三島さんはあえてやつてているのよ。雲分裂の後に文学座新構想を掲げて、私

達を引っ張っていつてくれたのにねえ、何がなんだなあ。

シン 『喜びの琴』を上演して思想的に中道というのは維持できますかね？

キョウコ 私はこの作品は明らかに右翼に傾いていると読んだから、中道は難しいと思うわね。何より杉村さんの仰る通り、松川事件をひっくり返してる、これがいけないのよ。

右とか左とか関係なく、国民の皆さんから批判されると思いますよ。労演、NHKが買わないってだけで収まらない。

チホ ええ、ええ、私もそう思いますよ。

シン クサノはどう思ってるの？ 出演者として。

ミノリ 研究生に意見を求めます？

シン いいだろう別に。

ミノリ いやあ、座のゴタゴタに巻き込んで申し訳ないと思って。

シン でもまあ聞いてみよう、クサノは主役に大抜擢されたんだし。

ダイゴ ……。

シン 研究生だからって遠慮しなくていいから。

ダイゴ あ、はい、えっと、そうですね、僕の、あ、僕らの、演じ方というか、そういうので上手くやれる気がしているんですよ。思想だ政治だに染まらない、人間ドラマを立ち上げることができると思ってます。もちろん上演には賛成です。上演しちゃったらしっちゃったで、何の問題もなくて、取り越し苦労だったね、なんて笑い合っているんじゃないですかね。

ヤギ 若い人は楽観的よね。

ダイゴ 大丈夫だと思うんですけど。

シン 『喜びの琴』組は上演賛成か。北村もそう？

ケイスケ ……僕は……うーん、ちよつと……。

シン 企画会議の時は嫌そうにしてたよな。

ケイスケ ああ……でも稽古……していくうちに……どうかな……どうなんだろうな。

シン 賛成ってわけでもなさそうだな。

ケイスケ ……。

シン さあて、どうしようかな、議論は平行線だな。私が提案している上演保留は、皆さ
んどうなの？

トオル 上演保留なんて三島さんは納得しないでしよう。

シン そうかな、きつと分かってくれるよ。

トオル 三島さんは絶対にノーです。保留するくらいなら中止させて、文学座を辞めると
言い出すでしょうね。

シン 座として三島さんを失うわけにはいかないな。

ミノリ 当たり前ですよ、『鹿鳴館』は『女の一生』に並ぶ座のレパトリーになってる、
作家としての資質は世界基準に達してる。

シン でも、うちは三島劇団じゃない。三島さんは座に携わる作家のひとりではない。
ミノリ 大きなひとりじゃないですか。

キョウコ 大丈夫よ、三島さん辞めないんじゃないかしら。

シン ほらほら。

トオル そんなことないですって。

シン 長岡さんは三島さんとは家族ぐるみの付き合いがあるんだぞ。

トオル 僕が何本三島作品を演出してると思ってるんですか？

カズコ 総務に質問んだけど、どうして今日になって上演中止を訴えてきたの？ 上演中止にしたいなんて風はまったくなかった。

タダヒコ 総務は総務でこのことについてずっと話し合いを続けていたんです。業務は業務を進めるに決まってるじゃないですか。どうしようもなく行き詰まったのが昨日、だから戌井さんにお願ひして、今日こうして緊急の総会を開いてもらったんです。

カズコ 杉村さんと長岡さんの帰国は偶然ということね。

タダヒコ ええ、偶然ですよ。お二人が何かの事情で帰国が遅れても、今日総会を開いてもらったでしょう。

ヤギ 賀原さんはお二人の帰国に合わせて総務が総会を提案したと思ってるんですか？

カズコ だって、タイミングが、あまりにも。

チホ 夏子さん、なによ、あなた。

カズコ すみません。ちょっと気になったものですから。

チホ 中国へ行ってきたから思想が左に染まったとでも言いたいのか？

カズコ ……。

チホ 私の意見は絶対じゃありませんよ、文学座は民主的にやっているでしょう？ まるで私が独裁者みたいじゃない。

カズコ いえ……。

チホ みんなが腹の中で思っていることを私は聞きたいですよ。それで決めたい。

カズコ はい……。

トオル もう三島さん呼びましょう。

キョウコ ああ、それがいいわよ。

シン 三島さんと呼ぶ？ もっとこじれるんじゃないか。

トオル 三島さんの口からこの作品の狙いを聞けば、納得すると思いますよ。というかね、作者不在で上演の可否を論じ合うっていうのはナンセンスですよ。

ミノリ 異議なしっ。

タダヒコ 座の経営にどれだけ親身になってくれるかは甚だ疑問です。

ヤギ 文学座新構想といっても経営面に関しては何も提案されませんでしたしね。

タダヒコ 芸術面だけでしよう、やっぱり作家さんですから。

トオル 話が進展しませんよ、このまま続けても。

シン こんなゴチャゴチャした状況じゃ三島さんも困るだろう。

ミノリ 戌井さん、じゃあ、まとめてくださいよ。

シン だから、上演保留が適当だろう。

キョウコ それが妥当かもしれないわね。

シン でしょう、そうでしょう！

ミノリ 『喜びの琴』組は誰も納得しませんよ。

シン 中止じゃないって何回言わせるんだ？

トオル 保留は中止です、何回も言いますよ。

シン 私が説得してみせるっ。

トオル じゃあ、三島さん呼びましょう。

シン ああ、呼べよ、呼んでこいよ！

キョウコ 私が電話してこようか？

チホ ダメ！絶対にダメッ！！三島さん呼ばないで！

キョウコ ……。

チホ 三島さんは口がうまいんだから！言いくるめられてしまいうに決まってるじゃない！座に入って二十年以上、たくさんの芝居をやってきましたよ、色々なことがあって、それでもなんとか乗り越えてきた。でも、初めてなのよ、こんなに胸騒ぎがする作品は。とりかえしのつかないことになる、私は座もあなた達も失いたくないの！

沈黙。

キョウコ 一度、多数決をとりましょう。

シン 多数決は望ましくない、とことんまで話し合うべきです。

キョウコ 一度やってみるだけよ、これで決定ってわけじゃない。別の解決策が見えてくるかもしれないでしょう。

トオル やってみましょう、決定じゃないんだし。まあ、割れると思いますけど。

シン 皆さんはどうです？ 多数決。

タダヒコ やりましょう。

ミノリ やってみよう。

それぞれうなずいたりして多数決賛成の意思表示をする。

シン 杉村さん、いいですか？

チホ はい。

シン 上演賛成か反対か、保留か。

キョウコ ややこしいから保留はなしね。

シン えっ？

キョウコ 賛成か反対か、決まってから保留のことは考えればいいじゃない。

シン ああ、わかりました……。

キョウコ じゃあ、お願い。

シン 皆さん、いいですか？ 上演に賛成の人？

トオル、ミノリ、ダイゴ、カズコが手を挙げる。

シン 四人。じゃあ、反対の人は？

タダヒコ、ヤギ、チホ、キョウコが手を挙げて、

シン 私もです。あくまで一月上演は反対という意味で。

シンも手を挙げる。

シン 五人。ということは、賛成が四人で、反対が五人。ん？ 北村、手を挙げたか？
ケイスケ ……。

シン 賛成でいいのか？

ケイスケ (立ち上がる) ……。

シン ……。

ケイスケ ……僕には、この役はやれません……主要人物のひとりをまかさながら、今更なんです……いったんは引き受けてやろうとしたんですが、どうしても……この役の台詞、行為が、左翼的態度と思われるのは納得がいかない……左翼の人間が列車転覆事件を起こすなんて考えられない……三島さんにも座にも申し訳ないのですが……この役を下ろしてもらいたい……僕は上演に反対です……。

沈黙。

シン 賛成が四人、反対が六人。

トオル 反対の人がいますけど、反対はイコール三島由紀夫退座と同じなんですよ。作家に表現の自由を認めないということで、他の作家さんも退座をするでしょう。この先、秀逸な創作劇がやれるでしょうか？

ヤギ 新しい作家に出会ってほしいじゃないですか？

トオル 新しい作家？ 三島さん級の作家に心当たりがあるというのなら、宮本さん、紹介してくださいよ。

ヤギ それはあなたのする仕事でしょう？

トオル はあ、何を言ってるんだまったく……。

キヨウコ 賛成の人は三島さん派で、反対の人はお客さん派ってことよね、でしょう？

ミノリ 三島さんがいなくなればお客さんも減りますよ。

タダヒコ 三島さん目当てなのは一部でしょう。そんなに一人の作家に依存して大丈夫なんですか？ この先も振り回されるんじゃないですか？

ミノリ 俺は三島さんをとります。

タダヒコ 総務はもちろんお客さんをとります。

キヨウコ 私はお客さんをとる。でも、三島さんも辞めないと思うのよ、きっとね、意外にすんなりと中止を受け入れて別の作品の相談にのってくれるわよ。

トオル 三島さんは長岡さんには甘い一面しか見せてないんですよ、ひと回りも年上の妹だなんて長岡さんのことを仰ってましたから。

キヨウコ (笑う) あら、そう、妹なのね。

カズコ 三島さんに一票です。文学座は個人の思想には自由な劇団ですから。

ダイゴ 僕もです。三島さんの作品を今後もやっていきたいです。

ケイスケ ……。

トオル 戌井さん、堂々巡りですよ。

シン 今から、三島さんのところにいつてくる、明日また緊急で総会を開こう。

トオル 三島さんにはなんと伝えるんですか？

シン 保留だよ、一月の上演は中止、今後の上演については保留したい。

ミノリ 戌井さん！

シン 理事の責任で私が決めるしかないだろう。

ミノリ ……。

トオル 分かりました、仕方がない、三島さんが退座すれば僕も辞めます。

シン ……。

チホ 皆さん、三島さんは文学座に素晴らしい芝居をいくつも書いてくれましたよ。『鹿鳴

館』『大障碍』『薔薇と海賊』『熱帯樹』『十日の菊』、それに『トスカ』も含めれば、役

者としての私に新しい息吹を与えてくれました。三島さんには確固とした信念があります、でも、役者の私にも社会に対して思っていることはある、自分の信念を貫いて行動していきたい。三島さんと別れることになったら一番辛いのは私ですよ。でも、私はお客さんをとります。みんなも私を信じてついてきてちょうだい。

沈黙。

ケイスケ 僕達は一体何を怖れているんでしょう？ 三島さんですか？ お客さんですか？ 思想ですか？ 芝居ができないことですか？ 生活ができないことですか？ 文学座は何を怖れてここまでやってきたんですか？

それぞれ、ケイスケを見る。

少しの沈黙。

シン (マユミを見て) マユミ、これで終わり、今日の総会はこんな感じだった。

マユミ ありがとう。みんな、ありがとう。

それぞれ、演じていた緊張がほぐれる。

シン 実際はもつと人がいたんだよ、社長の龍岡さんとか演出部の鳴海さん、木村さん、加藤さん、総務部も全員来てたし、『喜びの琴』の出演者も全員出席。研究生も一期も二期も全員参加したけど、俺たち以外は終わったら逃げるように帰って行ったよ。

キョウコ 延々と七時間くらいやったからね。

マユミ あら、いやだ。

チホ 話が脱線するもんだから、くたびれちゃったわよ。

マユミ うまくまとめてくれたのね。

タダヒコ 出たところ勝負だったけどな、意外にみんなできたんじゃないか。

マユミ シンちゃんの眼鏡姿が新鮮。

シン 髪型も真似したかったんだけど、時間がなかったな。

マユミ 成井さんの髪型ってずっと一緒よね。

シン 子供の頃から変わってないんだろな。

マユミ 演出家って外見に無頓着すぎると思わない？

ダイゴ 松浦さんは違うだろう？ スーツをパリッと着こなしてる。

キョウコ ニューヨークに行ってさらに洗練された気がする、タバコの吸い方なんて。

チホ 私にはキザに見えるけどね。

キョウコ 色気があるじゃない？ 斜めに、こう、煙を吐き出す感じ。

ダイゴ こんな感じだよな（タバコを吸う仕草）。

キョウコ ああ、色気がもうちよっと欲しい。

ダイゴ （流し目でキョウコを見つめる）

キョウコ そういふことじゃなくて（ダイゴの顔面を手のひらでおさえる）。

シン こうだろ（タバコを吸う仕草）。

キョウコ そうそうそうそうそうそうそうそう！

トオル シンさん、よく見てるなあ。

シン 一期生は芥川さんが研究生ひとりひとりの癖やなんやらを完璧に真似させてくれた衝撃体験があるから。

タダヒコ 他人をよく観察しろってな。

ダイゴ 目が覚めてから寝るまで常に自分自身に意識的であってな、よく言われたな。

チホ そんなの疲れちゃうね。

ダイゴ クタクタだよ。

チホ 実践してるの？

ダイゴ 今だってチホと話しながら客観的に自分を観察してる。

チホ 偉いわね。ご苦労様。

マユミ どうしてダイちゃんは大イちゃんの役をやったの？

ダイゴ 自分の役をやるってなかなかないだろ？ これも自己観察。

マユミ 誰かがやるのを見た方がむしろ自己観察になるんじゃないの？

シン 自分の役をやってほしくなかったんだよ。鹿兒島訛りを誇張されでもしたら、飛びかかっちゃうよ。

ダイゴ 分かってるねえ。

マユミ 今は全然訛りなんてないのに。

ダイゴ ああ、でもきつとミノリなんかは誇張してくる。

マユミ ああ、そうね、ミノリはね。

ミノリ ねえ、俺、もう行っていいかな？

キョウコ 反省会の最中だよ。

ミノリ あんなの物真似大会じゃん、反省なんてしなくていいよ。

タダヒコ ミノリの北見さん、似てたなあ。

ミノリ ええ？ 似せようなんてひとつもしてないのに？

タダヒコ おお？

ミノリ 俺、北見さんと普段が似てるってこと？

キヨウコ 似てなくはなくはないかな。

ミノリ どっちだよ。

キヨウコ だから、似てなくはなくはないかな。なくはないかな。

ミノリ なくは、が増えてる。

キヨウコ あれえ。

シン 北見さんは文学座三大奇人の一人だぞ、誇りに思えよ。

ダイゴ ミノリも奇人だしな。

ミノリ 俺は行くよ。奇人に惚れる女の子もいるんだ。

シン 「コーヒーガーデン」のあの子か？

ミノリ (微笑む)

シン 俺も行くぞ。

ミノリ ついてくんよ。あとひと押しで落とせそうなんだから。

シン アルトウールとイエレミアスはどこに行くのも一緒だろ？

ミノリ 芝居のなかで十分だよ。

シン 今日の通し稽古は息が合わなかったからな、仕方がないな、息を合わせて口説こうな。

ミノリ シンちゃん、やめてくれよ。ほら、二期生がずっと待ちぼうけくらってるぞ。

チホ ああ、ごめんなさいね、解散にしましょう。

シン ああ、そうだな、悪かったね。

それぞれ端に寄せた『城』で使う小道具や装置を直し、椅子を元に戻す。

ミノリは作業の途中でこっそり、外へ出て行く。それを見つけたシンも追いかけて出て行く。

マユミ アルトなんちゃらとイエなんちゃらって『城』の登場人物でしょう？ 双子みたいな助手の。

タダヒコ そう。奇妙な役柄だからシンがはりきっちゃって、あれやこれやと色々なパターンを出してさ、ミノリも負けじとやってるよ。

マユミ 舞台美術って大がかりじゃないのね。

トオル 名古屋城とか小田原城とかがそびえ立ってると思いました？

マユミ バカにしてる。キヨウコ、トオルがバカにしてくる。

キヨウコ え？ ちよつと両手を上げなさいよ。

トオル え？

キヨウコ いいから、ほら、万歳って。

トオル (言われた通りに両手を上げる)

キヨウコ (トオルは言われた通りに動く) はい、手を合わせて、両肘曲げて、足を開いて曲げて、はい、お城！

トオル (すぐにやめる)

キヨウコ あ。

マユミ キヨウコもバカにしてるよね？ 私はちゃんと原作を読んだよ。

キョウコ 小説の？ あの長編を？

マユミ 当たり前でしょう。テレビドラマの仕事がなければ出られてたんだから。

キョウコ じゃあ、カフカの『城』の解説をお願いします。

マユミ 『城』は主人公Kが測量士として城に呼ばれたものの、いつまでたっても測量士として採用されず、城からの承認をあの手この手と必死に求めるのですが、最後まで宙ぶらりんな状態のままに置かれ続けるといってお話で、様々な解釈が可能な作品ですが、この時代の日本では、現代における孤独、つまり自己疎外がテーマとして掲げられるでしょう。

トオル 演出の加藤さんも同じことを。

マユミ 加藤さんに聞いたそのままを言ったからね。

トオル ……。

マユミ 来週本番か、楽しみだな。

トオル 本番一週間前にしては座内がざわついてますね。

タダヒコ な、『城』の公演が終わってからにしてくれよって思わない？ 『喜びの琴』の上演のあれこれは。

キョウコ そうか、さっきの総会ってカフカの『城』の舞台美術の中で、三島由紀夫作品をああだこうだ議論してたのね、おお、文学が溢れてる。

タダヒコ われわれは文学座でございますから。

キョウコ 仰る通りでございますな。

マユミ 私も演りたかったな。

タダヒコ ドラマ、見てるぞ、悪女っぷりが劇団内でも評判だよ。

キョウコ マユミってお嬢様だと思ってたのに。

マユミ 自分でもびっくりよ。

キョウコ 演じていて楽しいでしょ？

マユミ ううん、ぐったり。テレビも初めて悪女も初めてで、もう痩せちゃった。今夜も

これからまた行かなきゃいけないの。

キョウコ これから？

マユミ そう、どうしても夜更けの場面が撮りたいんだって。

キョウコ 大変。

マユミ まあ、若いうちはしのごの言わずにやるしかないよね。

キョウコ テレビからもっと仕事ができるんじゃない。

マユミ どうか。でも、俳優って舞台で評価されなきゃダメでしょう？ 映画もいいけ

どテレビに出たってなんだかね、だから、もっと舞台を踏みたい。技術も何もまだまだなんだから。

タダヒコ まあでも、マユミは華があるからな。

マユミ 華なんて若い時だけよ。

チホ 私にはないわね。

マユミ ある。舞台に出てるチホには自然と目がいく。

チホ 美男美女に混じってるからね。

マユミ 笑顔はとっってもかわいいよ。

チホ 笑顔は、でしょう。

マユミ そう、笑顔は。
ダイゴ あれ？ ミノリはどこ行った？
ヤギ ミノリさん、出て行きましたよ。シンさんもミノリさんを追っかけて。
ダイゴ あの女好きどもめ。
チホ 「コーヒーガーデン」って喫茶店よね？ 四谷三丁目の駅前？
ダイゴ うん。

チホはそそくさとホールの扉から出て行く。

ダイゴ シンにくっついて回るなあ。

カズコ ダイゴさん。

ダイゴ ん？

カズコ 今日の通し稽古でちょっと…。

ダイゴ おう。じゃあ、向こうで話そう。

ダイゴとカズコは舞台の方へ行く。

ケイスケが勢いよくホールの扉から出て行く。

マユミ 今、出て行ったのって……？

タダヒコ ああ、ケイスケだよ。

マユミ あ、ケイスケ君。

タダヒコ この前も聞かれたぞ。

マユミ どうしてもあの子の名前だけ頭に入らないのよね。

タダヒコ あいつ、最後おかしなこと言いやがって。

マユミ 「文学座は何を怖れてここまで……」ってところ？

タダヒコ そう、かっこつけたんだよ。

マユミ 北村さんはあんなこと言わないか。

タダヒコ 実際は北村さん、泣いちゃってさ。

マユミ へえ、そう、泣いちゃったんだ。

タダヒコ あんなに共産党に思い入れがあるとはね、びっくりしたよ。

マユミ 泣いちゃうほどできない役かあ……悪女なんて別に大したことはないわね。

タダヒコ マユミは思想はどうなの？

マユミ どうって言われても答えようがないわよ。学生の頃、全学連に入っている彼がいたの。マルクスだ、アメリカ帝国主義打倒だって熱く語るんだけど、私はまったく馴染めなくて、すぐ別れちゃった。

タダヒコ 俺も学生時代は集会にもデモにも行ったけど、芝居に出会っちゃったからな。マユミ 芝居をやらなければもつとのめり込んでた？

タダヒコ ああ、きつとそうだな。思想を語るやつってモテるんだよな、それでみんな必死になつてさ、資本論とかを読むんだよ、それでまあ分かった気になつてさ、女の子を口説くつていう。

マユミ 私もその彼に最初はうっとりしてたっけ、ふふふ。

キョウコ 私、先に帰るわね。

マユミ 今日もお店のお手伝い？

キョウコ そうよ、今日も割烹屋栗栖かつぼうやくりすの若女将。こちらはおかげさまで繁盛繁盛。ああ、お芝居が遠のく。

マユミ キョウコだってすぐに役がつくよ。

キョウコ いいのいいの、養成所から研究生に残れたのが私のピークって思うのよ。

マユミ まだ始まったばかりじゃない。

キョウコ 終わりの始まりよ。

ダイゴとカズコが笑い合っている。

キョウコ じれったいな、あの二人。

マユミ ダイちゃんて本気になると奥手になるからね。

タダヒコ 俺はダイゴとキョウコがくっつくと思ってたよ。

キョウコ ね、私もくっつくと思ってたんだけど、そうはならなかったよね。

タダヒコ あ、そういう感じなんだ。

キョウコ ま、同期で付き合っているのもあんまりね。

マユミ うん、そう思う。

ヤギ キョウコさん、今日はお店のお手伝い、大丈夫ですか？

キョウコ 来てくれると助かる。

ヤギ じゃあ、行きます。

キョウコ ありがとう。うちのお父ちゃん、ヤギちゃんを連れてこいって、しょっちゅうよ。

ヤギ わあああ、嬉しい。

キョウコ 先に行ってるから。ゆっくりで大丈夫よ。

キョウコが出ていこうとすると、ケイスケがシンとミノリを強引に連れてホール
扉から帰ってくる。その後にはホも続いて入ってくる。ケイスケはキョウコを押し
のけ、ホールの扉を閉める。ざわつく研究生たち。

ダイゴ どうした？

ミノリ いや、こいつが追っかけてきてさ、「戻ってください、戻ってください！」って喚
き散らすもんだからさ。何があったって聞いても、「戻ってください！」しか言わない。
シン また緊急総会でも始まるの？

ダイゴ いや、誰もそんなこと言いに来てないぞ。

シン ケイスケ。

ケイスケ ……皆さんにはがっかりですよ。

シン え？

ケイスケ がっかりだと言ったんです！

沈黙。

ケイスケ 僕は、一期生の先輩方も二期生の同期も俳優としての才能を買っているんです。僕達の中軸になった時の文学座は他の劇団の追隨を許さないでしょう。でも！ 皆さんにはこの文学座への思いがまったくないじゃありませんか！ 今日の緊急総会を再現した後に誰一人として劇団のこれからをこうしていかうとか、そういう発言が出なかった。これは問題です、大問題ですよ！ 研究生の間でも熱い議論が交わされると思っていたのに、何もない、皆さんは何も感じていないんですか？ 研究生だからって上層部の決定にただ従うというのは違うと思います！

少しの沈黙。

タダヒコ 実は俺も気になってはいたんだけど、俺たち、研究生も意見を持っていた方がよくないかな？

ダイゴ 『喜びの琴』、上演賛成か反対かってこと？

タダヒコ そう、ダイゴはそりゃ賛成だろうけどさ。

ダイゴ お前は反対なの？

タダヒコ 俺、さっき阿部さんの役をやっただろう？ 正直あの人苦手で阿部さんを演ずることにあまり乗り気じゃなかったから、逆に大袈裟なくらい阿部さんをやってやろうと思ってやってみたわけさ。そうしたら、阿部さんの言い分に少し共感できるようななっちゃってさ、それまでは上演賛成当たり前聞く耳一切持ちませんっていう構えでいたんだけど、みんなの意見を聞きたくなくなっちゃった。

シン 戌井さんをやっても俺は変わらなかったな。上演賛成。

タダヒコ シンは外からつくっていくタイプだからかな。

シン 戌井さんをどう批判的に造形していかって思いながらやってた。変に誇張するんじゃないくて、あくまでノーマルに、とことんノーマルにやって、それでいて批判的に演じるように心がけた。

ダイゴ 批判的って、例えばどんな感じ？

シン 戌井さんの意見が俺の考えと違うなって時は、眼鏡を外して、目をしばたかさせた。

ダイゴ うはっ、批判的ってそういうことなの？

チホ 私、笑っちゃった。

シン 気がついた？

チホ あれは変な誇張よ。

シン 加減が難しいんだよな。

ケイスケ 脱線してます、脱線してますから！

チホ 真面目ねえ。

ケイスケ 真面目にならなくてどうするんですか、劇団の非常事態ですよ。チホさんは特に劇団への思いが足りないと思います。

チホ 当たってる。

ケイスケ シンさんもそうです。

ミノリ 俺が一番ないんじゃないか。

ケイスケ はなっからミノリさんは論外です。

ミノリ 見る目があるんだな。

ケイスケ シンさんは岸田先生の一族でもあるのに。

シン そんなこと言われてもなあ、岸田今日子は劇団「雲」に行ったぞ、岸田國士の娘なの。

ケイスケ 呼び戻してきます。

シン おお？

ケイスケ 「雲」に行った人達全員を僕が呼び戻してきます。

タダヒコ そんなことできるわけないだろ、三十人もいるんだぞ。

ミノリ 芥川さんが戻ってきてくれたら嬉しいな。

ケイスケ やってみせます！

タダヒコ ちょっと落ち着けよ！

ケイスケ ……。

タダヒコ 「雲」のことは別問題だろ、今は『喜びの琴』上演賛成か反対かが問題の中心だろうがよ。

ケイスケ ……。

タダヒコ この中に上演反対の人はいるの？

キョウコ 私は反対。

ケイスケ 上演反対なんてあり得ない。

キョウコ 杉村さんを支持する。私は根っからの杉村春子信者だから。今の文学座があるのは杉村さんのおかげじゃない。

ケイスケ 杉村さんは確かに文学座そのものと言っても過言ではないですよ。だからといって、舞台の灯を思想ごときで消してはいけない、『喜びの琴』は絶対に上演されなければならぬんです。一度、思想問題で敗北したらこの先も思想云々でもめることになる、それで日和ってしまつたら、文学座は文学座ではなくなってしまう。そもそも文学座は戦前の思想の時代に、思想から離れて純粋に芸術をやるうと集まってきた劇団ですよ。この素晴らしい礎を杉村さんは忘れてしまつて。切符を売る大変さを訴えていますけれど、重要なのは舞台の成果で、興行的に失敗したつて作品それ自体が素晴らしければいいじゃありませんか。

タダヒコ 理想論だよそれは。

ケイスケ そうですか？ 僕は信じていますよ、素晴らしい作品を作り続ければ必ずお客さんはついてくるつて。

チホ あなた、そんなにしゃべる人じゃなかったよね、端っこの方で、いつも静かにしてて、ねえ。

ケイスケ ……。

ダイゴ 二期生の間じゃあこんな感じなんだ。

トオル いや、同期でもそんなに。僕も驚いています。

ヤギ 私も人に聞こえる声でいっぱいしゃべるケイスケを初めて見ました。感動しています。

チホ 無理してない？ 大丈夫？

ケイスケ 無理してません！ 僕はこういう人間です！

ダイゴ ヤギちゃんと仲良しなの？

ヤギ 仲良しだよ。

ケイスケ (照れる)

マユミ 上演賛成反対の前にさ、そもそも私たちって、座員なのかな？

シン 俺もそれを考えてた。俺たちって座員であって座員でないような、宙ぶらりんな立

ち位置だよ。

キョウコ 宙ぶらりん、『城』のKみたいじゃない。

シン そうだな、研究生は誰もがKに自分を重ねちゃうんじゃないの？

タダヒコ うん、俺、まさにそう。Kの宙ぶらりんな感じに共感だよ、共感。

マユミ 他の現場で「文学座のオガワマユミです」って一応名乗るけど、どこか違和感がある。

ダイゴ ああ、分かるなそれ。

ミノリ アルバイトみたいな感覚だな俺も。でも、芝居はちゃんとやる。

タダヒコ 「雲」の分裂事件でいっぱい辞めちゃったといっても、来年座員に上がれるか

どうかは分からないしな、特に俺は。

マユミ タダヒコは大丈夫でしょう。

タダヒコ いやいや。

マユミ だって、

タダヒコ 聞いちゃったんだよな、酒の席で、木村さんから。

マユミ ん？

タダヒコ 来年か再来年か、木村さんの演出で『怒りをこめてふりかえれ』をアトリエでやるんだろ？

マユミ あ。

キョウコ へー、そうなんだ。

タダヒコ そう、主要人物の若者の男二人と女二人、女の一人は先輩の川口さんで、もう

一人がマユミ、それで男の二人がシンとダイゴ。

マユミ 誰にも言うなって念押しされたのに。

タダヒコ これってもう座員決定ってことだよ。

チホ 木村さんの演出大好き、ウエスカーの『調理場』、見事だったもの。

タダヒコ その才能ある演出家に俺は選ばれなかった。

シン 役のイメージに合ってただけだよ。

タダヒコ それもあるだろうけど、それだけじゃないよ。

ダイゴ 酔っ払って言ったことなんて全部冗談だよ。

タダヒコ そうか？ 木村さん、目を輝かせてたぞ。

ダイゴ 正式に決まったわけじゃないし、気にすんなよ。

タダヒコ 気にするだろ。

キョウコ いいなあ、三人は座員決定よ。

マユミ まだ分かんないって。

キョウコ 分かる分かる。

トオル 先輩座員の中にはいい個性がありますからね。

ダイゴ まあ、同じような俳優がいても仕方がないからな。

チホ 私達、杉村さんとうんと歳が離れていて良かったね、あの世代のヒロインはほとんど杉村さんがやっちゃうものね。

キョウコ ほんとにね。でも、お手本になるような人がいて良かったと思わない？

マユミ うん。観ているよりも実際に同じ舞台に立つと杉村さんの凄さがより分かる。

キョウコ 文学座の俳優が目指すべき演技。

トオル 自然に演じる、言葉を大切に演じる、美しい所作を身につける。

シン 俺は特に意識してないなあ。

ダイゴ 意識しないでも、先輩たちはそこを目指しているから、俺たちもそういう演技をするようになってると思う。シンもだぞ。

シン ええ、そうか、なんか悔しいな。

ダイゴ 自然に演じるからって人物の緻密な心理描写をやったって大概は頭で考えた演技だよ、台詞を組み立ててる感じが伝わってくる。

シン 新劇の俳優ってそこを言われちゃうよな。

ダイゴ だから肉体から言葉を発しないとダメだよ。もっと言えば、非日常を作り出す肉体、舞台を横切るだけで空間を虚構にさせる肉体が必要だよ、これからの俳優には。

キョウコ どういう体なの？

ダイゴ 魂にポエムがあって、完璧に制御することのできる肉体。

キョウコ んん？ わかる？

マユミ 超人なんじゃない？

チホ 出演者が全員、超人になったらつまらない。欠点がないとその人の魅力なんて出てきようがないんだから。

タダヒコ チホはいいこと言うなあ。俺の欠点が上層部に魅力的に映ることを願うよ。

トオル でも、今回の『喜びの琴』が上演中止になって賛成派が本当に全員退座したら、研究生にとってはいい状況になりますね。

タダヒコ 不謹慎にもそれをさ、ちよっと期待しちゃうてるんだよ、俺。

キョウコ 私も。

チホ でも、劇団解散なんてことになるかもしれないね。

ダイゴ その可能性もあるな。

ミノリ 解散したら俺は「雲」に行っちゃうな。就職もありかな。

ケイスケ 絶対に解散なんてさせません！

ダイゴ 文学座愛が眩しいよ。

ケイスケ 大仰に聞こえるかもしれませんが、『女の一生』を観て、僕は人生を救われたんです。

チホ へええええ、洪いのねえ。

ケイスケ 杉村さん演じる布引けいの人生が、両親の代わりに僕を育ててくれた祖母の人生を、そっくりとはいかないまでも、思い起こさせるものがあった、本を読んでも映画

を見て泣いたことがなかったのに、僕は泣いたんです。特に、幕切れ近くで布引けい
が一生を振り返り、自らの孤独を憂う場面は台詞をそらんじられるくらい……」「私此の
頃になって時々考えるんです。私の一生ってものは一体何だったんだろう。子供の時分
から唯もう他人様の為に働いて他人様がああしろと言われればその様にし、今度はそれ
がいけないと言つて、身近の人からそむいて行かれ、やっとみんなが帰つて来たと思つ
たら、何も彼もめっちゃめちゃにされてしまい、自分と言う者が一体どこにあるんだか……」
……生前、祖母にはなんの恩返しもできなかったから、僕が俳優になれば、芝居好きの
祖母がああ世で喜んでくれると思つたんです。当時、両親の問題で生きる意味を見失つ
ていましたから、俳優になることは僕の生きる希望にもなつたんです。文学座の芝居は、
俳優座、民藝と見比べてみても、リアリズムの追求が抜きん出ていたし、このアトリエ
という野心的な空間で上演される演目はどれも鮮烈だったから……あ、僕の話なんてど
うでもいいんです！

チホ ちゃんと入る前に新劇のお芝居を観てるのね。

ミノリ 俺たちなんて芝居観たのは文学座に入ってからだよな？

マユミ 私は観てたよ。

ケイスケ あああ、とにかく僕は文学座を救いたい、盛り上げたいんです、だから『喜び
の琴』の上演を中止するわけには。

キョウコ 『喜びの琴』ってそんなに問題がある戯曲なの？

ダイゴ 俺はそこまでないと思うんだけどな。

マユミ 琴は松川事件と関係があるの？

ダイゴ ないよな？

シン うん、ないと思うよ。信頼していた先輩刑事に裏切られて絶望に陥つた若い刑事に
聞こえてくるんだよ、幻聴のように、琴の音が。

マユミ ふーん、そういう意味があるのね。台本、読ませてくれる？

ダイゴ ああ。

ダイゴは『喜びの琴』の台本をマユミに渡す。

マユミ 女性は掃除のおばちゃんだけなんだ。

チホ 男性ばかりでおもしろくなさそうね。

タダヒコ でも、座員から研究生まで男が総出演する公演なんて、今までになかつたんじ
ゃないか。

チホ 女の悪口を散々言い合つてそう。

タダヒコ 巷の会社員の話じゃないぞ。

マユミ ダイちゃん、台詞たくさんね。

ダイゴ 大変だよ。

カズコ 「考えてみろよ、二・二六の将校は英雄になったが、彼らに射たれて死んだ警官
は名前も忘れられ、ただガラスのケースの中の英雄になった。俺たちは永遠の脇役で、
権力と反逆者の板ばさみになって、つまらない人間のために身を捨てるんだ。そのと
き残るのは何だと思う。同じ立場の俺たちの間の信頼だけだ」

と、突然カズコが『喜びの琴』の台本を持って読み始めた。シンが自分の台本をカズコに渡し、ミノリの台本をヤギに渡したのだ。ヤギも台本を持って相手役をする。

ヤギ 「警察官も一つの職業だよ。人を疑うのが商売で、それに徹すりゃいいんだ。疑ってるうちに、カンも発達してくる。そうすりゃ疑わなくていいことと、疑うべきこととの区別がついてくる。そうなるための第一歩は、まず何でも疑ってかかることだ。人を見れば泥棒と思え、さ。まずそこから始めるんだ。そうして疑う技術を洗練するんだ。人を信じるだの信頼するだのって、耳や目が遠くなってからでもゆっくりできるぜ」：

：シンさん、まだやった方がいいですか？

シン いや、ありがとう。

キョウコ なによ、カズコとヤギちゃんに読ませちゃって。

シン 俺とダイゴが読んでも、これ見よがしだろう？

マユミ 二人のシーンなんだ。

シン そう、好きなんだよな、このやりとり。信頼か疑いか。

チホ だからってねえ、みんなの前でわけもわからず、嫌だったでしょう？

ヤギ 緊張しましたよー。

シン ごめんごめん。

チホ 男って無意識にそういうことさせるから。

カズコ 「俺たちは永遠の脇役で、権力と反逆者の板ばさみになって、つまらない人間のためにも身を捨てるんだ」……ここって私たちに当てはまる気がします。

ダイゴ 研究生たちは永遠の脇役で、上演賛成派と反対派の板ばさみになって、つまらない人間のためにも身を捨てるんだ。

シン ははっ、そうなるか。

カズコ つまらない人間っていうのは違うと思いますけど。

ミノリ いや、そんなことないよ、劇団のおもしろい人たちはみんな「雲」に行っちゃったから。

キョウコ 杉村さんは違うでしょう。

ミノリ 杉村さんはまあ、傑出した人だな。俳優としてはな。

キョウコ 偉そうに。

ケイスケ みなさんは身を捨てられますか？ 劇団のために命を賭けられますか？

チホ すぐにそっちにもっていくのね。

ケイスケ 真剣なだけです。

チホ トオルちゃん、真面目な同期ね。

トオル ……。

タダヒコ トオルはどう思ってるの？

トオル はっきりいっちゃうと、僕は上演についてはどっちだっていいんです。俳優の仕事がきてくれさえすれば。

チホ 同期がこう言ってるけど？

ケイスケ トオル君はそういう人なんです。でも、そういう人が演技が上手かったりする

から人生は不平等だなと思います。きつとトオル君は難なく文学座の座員となって、若手の有望株として杉村さんの相手役をやったり、ハムレットを演じたり、二時間半もある一人芝居を電車が遅れたからと三十分もまいたり、六十年後には文学座の代表になったりしていると思います。

チホ 文学座を背負って立つ存在になるんだって、良かったじゃない。

トオル 適当なことを言うんじゃないよ。

キョウコ でも、嬉しそう。

トオル (嬉しそうに) 嬉しくない！

キョウコ もう一回言っつて。

トオル うれ……いいんですよこんな話は。ケイスケ君さ、ここで議論したところで研究生の意見を座員の先輩方が聞いてくれると思う？

ケイスケ 聞いてくれるまでしつこく話す。

トオル きつと大きな影響力はないよ、それでも議論する？

ケイスケ 違う解決策が出てくるかもしれない。

ミノリ 議論するよりも実践あるのみだね。

ダイゴ なんだよ実践って？

ミノリ ん、そうだなあ……封鎖する、アトリエを封鎖するんだよ、上演が決定するまで

研究生みんなでアトリエに立てこもる。

ケイスケ それです！ 封鎖しましょう！ アトリエ闘争！

チホ どこまで大袈裟にしたいのよ。

ダイゴ 封鎖するのはおもしろそうだな。

シン うん、椅子と机を入口に積んで。

ダイゴ ああ、いっぱいあるしな。

トオル 怒られませんか？

ダイゴ 大丈夫だよ、先輩たちはみんな帰ったから。(鍵を取り出して) ほら、鍵も渡されてんだよ。

シン どんな雰囲気になるかってさ。俳優修行にもなるぞ。

シンとダイゴとミノリとケイスケはホールの扉の内側の鍵をかけ、ロープで扉の取手をぐるぐるに巻いて固定し、入口に机と椅子を積み上げていく。

ミノリ おおっ、おおっ。

シン 革命の匂いがしてきたな。

キョウコ やりすぎなんじゃない？ もし誰かが残ってたらどうするの？

ダイゴ 芝居の稽古してましたって言えば、大丈夫だよ。

シンとダイゴとミノリとケイスケはさらに椅子と机を積み上げていき、完全に入口を封鎖する。

ダイゴ 完全封鎖したぞ。

入口が封鎖されたことで変化した空間の雰囲気をそれぞれが感じる時間が流れる。

シン さて、どうする？

ダイゴ 立てこもってるだけじゃ退屈だな。かといって議論するのもな。

トオル 学生連中なんかは歌ったりしてますよね、「インターナショナル」？

タダヒコ (歌う) ♪ 「起^たて 飢^うえたる者よ……」誰も知らないの？

全員 ……。

タダヒコ さすが文学座の研究生、みんなノンポリ。

チホ みんなが知ってる歌でいいじゃない？

マユミ そうよ、こういうのは歌の内容よりも一体感が大事なんだから。

シン ヤギちゃん、何かないかな？

ヤギ えええ、私ですか？ えええ、あ、流行ってる歌がいいんですかね？ 「こんにちは、赤ちゃん」？

一瞬の間の後、

全員 (歌う) ♪ こんにちは 赤ちゃん あなたの……

全員、「いやいやいやいやいや」と手を振る。

ケイスケ ふざけないでください！

ミノリ お前が一番大きな声で歌ってたじゃん。

ケイスケ ……。

トオル (歌う) ♪ 上を向いて歩こう 涙がこぼれないように

トオルはホール内を歌いながら歩き始める。トオルを追って、皆、青春映画の若者たちが列に並び歌い歩くように続いていく。

男全員 ♪ 泣きながら歩く ひとりぼっちの夜

女全員 ♪ 幸せは雲の上に 幸せは空の上に

全員 ♪ 上を向いて歩こう 涙がこぼれないように 泣きながら歩く ひとりぼっちの夜……。

全員、打ちひしがれたかのように沈黙する。

キョウコ こういうさ、日活の青春映画みたいな雰囲気って私達には合わないね。

マユミ 吉永小百合みたいな透明感がないからね。

ヤギ 透明感でいったら私、あると思うんですよ。

全員 そうですね。

チホ 私はとでもしつくりきたんだけど。

ミノリ 一番違和感があったけどな。

タダヒコ 食っていくためには娯楽映画にも出られるようにならないと。

ダイゴ 選り好みなんかしてられないからな。

トオル やっぱり研究生っていう立場だとドラマや映画に出ても報酬はけっこう劇団に持っていかれるんですか？

マユミ まあまあ持っていていかれちゃう。

トオル 座員になったら月給でもらえるんですよね？

タダヒコ 月給なんて聞いたことないぞ。

マユミ ないなあ。

トオル ええええ、いや、きつともらえますよ。

マユミ 期待しない方がいいと思う。

トオル ……。

カズコ (ダイゴに) デモみたいですね。

ダイゴ ん？

カズコ こういう風にみんなで列になって歩くのって、デモみたいじゃないですか？

ダイゴ まあ、学生のデモに比べたら人数は圧倒的に少ないけどな。

シン デモか、シュプレヒコールするんだろう。

タダヒコ 学生の頃にやったよ、声が枯れるまで。

シン 今のこの状況で研究生があげるシュプレヒコールはなんだろうな。

ケイスケ 文学座！ 文学座！

タダヒコ 応援するのかよ。間違っではないけど。

ミノリ 三島を守れ！ 上演賛成！

全員、ミノリを見る。

ミノリ なんだよ？ ダメ？

ダイゴ ダメじゃない。ダメじゃないけどミノリらしくない。

ミノリ らしさ？ そんなものあるか。

シン ミノリは、全部反対！ 劇団解散！ だろ？

ミノリ それも悪くないなあ。でもほら、三島さんは『十日の菊』の時、みんなの前で俺を褒めてくれただろ？ あれ、ほんとに嬉しかったんだよ。それに『喜びの琴』は、俺はそんなにいい役じゃないけど、ダイちゃんが主役だから、上演しないわけにはいかないでしょ。

少しの沈黙。

マユミ (ミノリを抱きしめる)

ミノリ おっ。

マユミ (ミノリを抱きしめたまま) 友情。素敵。

キョウコ なんでマユミが。

ダイゴ (マユミを抱きしめる) 友情。感謝。

キョウコ なんでマユミを？

シン (マユミを抱きつく) 友情。いい匂い。

キョウコ お前もマユミに？

チホ (マユミを抱きつく)

キョウコ どういう状況？

チホ ああ、ベルサイユの香り。

トオル (マユミの匂いを嗅ぎにいこうとする)

キョウコ (トオルを制して) いいのよ、いなくて。

トオル ベルサイユって……。

キョウコ うるさいっ！

マユミ (抱きついた状態のまま) 三島を守れ……上演賛成……三島を守れ、上演賛成。

シン (抱きついた状態のまま) 三島を守れ、上演賛成。

ミノリ・ダイゴ (抱きついた状態のまま) 三島を守れ、上演賛成。

ケイスケ (抱きついていいる人たちの外から) 三島を守れ！ 上演賛成！

マユミ・シン・ダイゴ・ミノリ・ケイスケ・チホ 三島を守れ！ 上演賛成！

「三島を守れ！ 上演賛成！」と言いながら抱き合った状態がくずれ、自然とデモ行進の隊形になって歩き出し、封鎖された入口付近で止まる。タダヒコ、トオル、カズコ、ヤギも加わる。そして、「扉に向かって、「三島を守れ！ 上演賛成！」と連呼する。キョウコは一応皆についていくが、シュプレヒコールはしない。

マユミ ちょっと待って！！

全員、マユミを見る。

マユミ キョウコがシュプレヒコールしてない。

全員、キョウコを見る。

キョウコ 別にいいじゃない。

マユミ こういうのって一人でも冷めている人がいるとバカらしくなっちゃうんだけど。

キョウコ だってただの悪ふざけでしょ？

マユミ 悪ふざけならシュプレヒコールできるでしょう？ カズコもヤギちゃんもやってくるのよ！

キョウコ えええ？ やめてよそういうの。

マユミ ……。

キョウコ ちょっとシンちゃん。

シン ……。
キョウコ ……え、なに、なによ。
ダイゴ ……。
キョウコ ちょっと、もうやだ、冗談でしょう？ 悪ふざけでしょう？

冗談ではないような空気が支配し出す。

キョウコ ……え。

ミノリ ダイちゃんが主役なんだぞ。

キョウコ ……。

ミノリ 仲間を応援できないってのかよ。

キョウコ ……。

ダイゴ 大丈夫だよ、ただの悪ふざけだよ。

ヤギ そうですよ、キョウコさん、ただの悪ふざけですから、一緒に声をあげましょう。

キョウコ ……はあ？

全員（キョウコ以外） 三島を守れ！ 上演賛成！ 三島を守れ！ 上演賛成！

マユミ 言いなさいって！

キョウコ 私は言わない！ 杉村さんが反対と言ったんだからいくら悪ふざけでも上演賛成なんて口が裂けても言わない！ ダイちゃんが主役だろうと関係ない！ みんな私がどれくらい杉村さんを尊敬しているか分かってるでしょう？ ひどいよ、悪ふざけがひどすぎるって！

シン 分かったよ、これは悪ふざけじゃない、演技だよ。演技なら言えるだろう？

キョウコ は？

マユミ 言いなさいよ！ 演技なんだから言えるでしょう！

キョウコ ……どこまで本気でやってるの？

マユミ 全部本気でやってる、演技なんだから本気でやるでしょう？ キョウコは女優じゃないの！？

キョウコ もうやめて、やめてよ！

マユミ 殻を破りたくないの！？ ずっとくすぶってるくせに！

キョウコ ……。

マユミ キョウコの演技は杉村さんの真似の真似の真似、その真似も下手くそだから本当に見ていられない。分かる？ キョウコは杉村春子にはなれないの、杉村春子には絶対になれない。個性を見せてよ、唯一無二のキョウコが見たい。キョウコ自身の道に踏み出せば必ず変われる。杉村さんだってそう願っているはずよ。大丈夫、キョウコには才能があるんだから。それに私たちがついてる。本当の、本当の声を聞かせて。

キョウコ ……。

マユミ 三島を守れ、上演賛成。

全員（キョウコ以外） 三島を守れ、上演賛成、三島を守れ！ 上演賛成！

キョウコ ……私には言えない。

マユミ ……！

マユミがキョウコにつかみかかるが、ダイゴとチホがマユミを止める。

チホ マユミさんマユミさん、落ち着いて。

マユミ ……。

キョウコ ……。

チホ やりすぎちゃった、キョウコさん、ごめんなさいね。

シン ごめんな、キョウコひとりを責めちゃったな。

ダイゴ こんなになるとは思わなかった。ほんとごめん。

ヤギ キョウコさん、すみません

ミノリ ごめん!!

トオル 調子にのっちゃいました。

タダヒコ ごめんな。

マユミ キョウコ、ごめんね。ああ、これはやりすぎてるなって自分でも思いながらも止められなかった。責め立てていくことってなんか、快感なのかな、ふふふ、ああ、本当にごめんね、さっき言ったことは全部嘘だからね、微塵もあんなこと思ってもないから、気にしないで。

キョウコ ……。

キョウコは集団から離れていく。

全員 ……。

キョウコ ……マユミ、さっき私が帰るって言った時、あなたは迷いもなく「今日もお店のお手伝い？」って聞いてきたんだよ、私には演技の仕事があるわけないって思ってるんでしょ？ その通りよ。何もない。今言ったことも本音でしょ。

マユミ ……。

キョウコ 『城』にあんたが出られなくなると聞いて、私が出演できると思った。でも、

選ばれたのはカズコ。

カズコ ……。

キョウコ 私を見てほくそ笑んでるんでしょう？

カズコ そんなことはありません。

チホ 私だってね、選ばれなかったし、何の予定もないよ。

キョウコ チホは杉村さんに気に入られてる。映画の撮影に連れて行ってもらってるじゃない。杉村さんが「研究生で誰かついてきなさい」って仰って、杉村さんはチホを選んだ。

チホ 手を挙げてくれれば良かったのに。

キョウコ 挙げられるわけない、杉村さんは明らかにチホを見て言っていたもの。

チホ 私が世間知らずだからでしょう、社会勉強させたかったのよ。

キョウコ 違うよ、チホには才能がある。才能がないから私は今みたいに、みんなに責められる。

シン いやいやいやいやいや、関係ないよ、偶然だよ偶然、たまたまそういう流れになっちゃっただけで、申し訳なかった！
キョウコ ……。

ミノリ え、お前、なんで泣いてるの？

ケイスケが泣いている。

ケイスケ 僕も同じです。『城』にも選ばれなかったし、『喜びの琴』は研究生も含めて男性は全員出演ってことになってますけど僕は選ばれていないんです。それに、演技だろうと杉村さんに反対しなかったキョウコさんの気持ちに分かるんです。僕は総会の再現で北村さんの役をやったでしょう、「僕にはこの台詞は言えません」って北村さんは……だから、うううううう……。

ミノリ お前の情緒はどうなっている。

ヤギ ケイスケ、私も同じだよ、『城』にも選ばれなかったし、俳優の仕事もない。でもね、私は落ち込まないって決めたの、だから落ち込まないの。ほら、私の笑顔を見るといいよ、キラン。

ケイスケ ……透……明……感……？

突然、扉を引く音がする。

タダヒコ あ。

外から誰かが入ってこようとしているようだ。全員に緊張が走る。外から鍵をジャンジャラつと取り出す音がし、外側の鍵を開け再び扉を引くが、取手をロープで固く結んであるので開くことができない。扉を叩く音が響く。

(声) おーい！ なんだーこれ！ 開かないぞー！

全員 ……。

(声) 研究生ー！ いるんだろー！

全員 ……。

(声) どうしたー！？ おい！ 何かかひっかかかってるぞ！ 開かないぞー！

声の主は扉を開こうと努力するが開けられない。

シン 加藤さんか？ まだいたんだな。

ダイゴ ああ、どうする？

シン え、芝居の稽古だって言うんだろ？

ダイゴ え、あ、ああ、そうだな、なんの？ なんの芝居の稽古？

シン え、そりゃ、『城』の稽古だろ？

ダイゴ 立てこもる場面なんてないだろう？

シン ああ、でも、なく、なく、なくはないかな。
ダイゴ やめろ、それ。

(声) おーい！ 開けろってー！！
タダヒコ 開けたほうがよくないか？

ミノリ 開けなくていいよ、ダイちゃんがうまくやってくれるよ。

ダイゴ このまま静かにしてるってのも手だよな？

ミノリ 日和っちゃった？

ダイゴ ……追っ払ってやるよ。

ダイゴは扉の前へ行く。

ダイゴ (扉の外に向かって) 今ー！ 研究生たちでー、

キョウコ 加藤さーん！

と、ダイゴが言いかけたところでキョウコが割り込む。

ダイゴ ー。

(声) キョウコかー！？ どうしたー！？

キョウコ 『喜びの琴』の上演賛否について、研究生だけで話し合いましたー！

(声) ……。

キョウコ 研究生は全会一致で上演には反対ということになりましたー！

(声) ……。

キョウコ 上演中止が決定するまで研究生はこのアトリエを占拠しますっ！

全員 ……。

(声) お前ら本気で言ってるのか！？

キョウコ もちろん本気です！

(声) ちょっと話をしよう、俺を入れてくれるか？

キョウコ 認められません！ 上演中止が決定するまで研究生は断固として外部との直接的な接触を断つと決めました。

(声) シン！ シン！ いるんだろう！？

シンは扉の前へ行く。

シン はい、キシダですー！

(声) キョウコの言ってることは本当か！？

シン ……はい、本当ですー！

キョウコ以外の全員、ざわつく。

(声) 他の研究生も同じ意見か！？

シン そうですー！

ダイゴ シン！？

シン (曖昧な微笑)。

(声) アトリエを占拠するまでのことか？

キョウコ 研究生がいかにかこの問題と向き合っているかを分かってもらいたいです！

(声) 俺から上の人達に研究生の意見を伝える、それじゃダメか！？

以下、キョウコと(声)のやりとりの間、ケイスケが扉へ行き外に向かって何か言おうとするが、シンに制されるといふことが起きる。

キョウコ ダメです！ 言葉よりも実際の行動を見てもらわないと！

(声) お前らが上演を反対する理由はなんだ！？

キョウコ 研究生は満場一致で杉村春子さんについていく！ それが理由です！

(声) ……。

キョウコ 上演中止が決定すればすぐにアトリエを解放します。

(声) 明日も稽古はある！ 『城』は来週が本番なんだぞ！ 『喜びの琴』の問題と『城』の上演は関係がないだろう！

キョウコ 関係ありますよ！ 文学座の問題じゃないですか！

(声) 研究生がどうのこうのいう問題じゃないんだよ！ いいから開けろ！

声の主は扉をガンガン引く。ミノリが扉へ行き、さらに他のロープを使って扉の取手を椅子や机に結びつけてもっと頑丈にして開けられないようにする。

(声) こんなことしてたら『城』も上演中止になるぞ！

シン 出演するメンバーの腹は決まっています！ 加藤さん！ 僕たちは本気です！

(声) ……。

声の主は扉を引くのをやめる。そして、しばらくは何も反応がなくなる。ミノリが扉に耳をそばたてる。

ミノリ ……いない。いなくなった。

キョウコは扉から離れ、研究生たちから距離をとって腰を下ろす。

タダヒコ シン、怒らせたよこれは。

シン そうだな。

タダヒコ 加藤さん、『城』が文学座初演作品なのに。

シン え、そうなの？

タダヒコ そうだよ、稽古だっけかなりの熱の入れようだろ、だからまずいよ今のは。ケイスケ どうしてあんなこと言ったんですか？ 上演反対って……。

シン いや、キョウコにさつき……ひどいことをしたたろ？ だから罪滅ぼしというか。キョウコ ……。

シン まあ、キョウコがどう思うかだけど……。

ヤギ 罪滅ぼしになってると思います。ね、キョウコさん。

タダヒコ ヤギちゃん強気だな。

キョウコ (苦笑)

ヤギ シンさんの心の底からの申し訳ないという気持ちとこぼれる優しさがとても伝わってきたじゃないですか。

タダヒコ ヤギちゃんにはね。

ヤギ なので、私も上演反対、杉村春子さんを支持します。

カズコ なにそれ。

ヤギ ……。

カズコ ヤギちゃん、何言ってるの？

ヤギ 日本語。

カズコ なんなの？

ヤギ 人間。

カズコ 小学生男子？

ヤギ 成人した女性。

カズコ 大人にしては軽薄すぎる。

ヤギ 真情はあふれてる。

カズコ はあ？

チホ 上演反対派になったら許してくれるの？

ヤギ そうですよ。ね、キョウコさん。

キョウコ (苦笑)

ヤギ ほら、キョウコさん、笑ってるし。

チホ じゃあ、私もそちら側にいきます。

タダヒコ チホ？

チホ 上演しようがしまいがどっちだっていいじゃない。

カズコ さっきのことは全面的に私たちが悪い。でも、あんなやり方はないと思います。

キョウコさん、明らかに私達に復讐というか、困らせようと言ったじゃないですか。

キョウコ ……。

ダイゴ シンもさあ、勝手に言いやがってさ。

シン だって、分かるだろ？

ダイゴ 分かんないな。『城』も『喜びの琴』も本当に上演中止になっちまうぞ。

シン ……。

ダイゴ ……。

タダヒコ 加藤さん、どうするかな？

トオル 戌井さんに報告するんじゃないですか。

タダヒコ 戌井さんが来たら厄介だな。

ケイスケ シンさん、もし戌井さんが来ても同じように言うつもりですか？

シン ……まあ、そりゃ。
ケイスケ 上演賛成と言いつ直してください。
シン うーん、それはな。
ケイスケ わかりました、僕が言いますから。
シン ……。

タダヒコが扉の前の椅子や机をどかし始める。

ミノリ 何やってんだよ。
タダヒコ 厄介なことになる前に帰るんだよ。
シン タダヒコ、いてくれよ。
タダヒコ いやあ……。
シン ……。

チホがタダヒコのところへ行く。

タダヒコ ん？

チホは「分かる分かるよ君の気持ちは分かるよ」という感じで、何度もうなずき、タダヒコの肩や背中をポンポンと叩いて、タダヒコをうまく誘導し、引き戻させる。

タダヒコ なになに？

チホ (何度もうなずく)

タダヒコ いや、俺は出て行くから。

チホはギュウっとタダヒコの手をつかむ。

チホ いてあげてよ。

タダヒコ ……。

チホは手を離す。

タダヒコ ……。
キョウコ マユミ。
マユミ ……。
キョウコ 私、殻を破ったと思わない？
マユミ ……。
キョウコ マユミのおかげね、ありがとう。
マユミ ……。

マユミはキョウコの目の前に行く。

マユミ 私のこと、ひっぱたいてくれる？

キョウコ ……。

マユミ それでおしまいね。

キョウコ 勝手に決めないで。

マユミ どうしたらいいのよ？

キョウコ 上演中止が決まるまで一緒に立てこもる。

マユミ できない、仕事がある。

キョウコ じゃあ、ダメね。

カズコ バカらしい。

キョウコ ……。

カズコ 被害者になつたら何をしてでも許されると思っっているんですか？

キョウコ そんなこと、多少は思ってる。

カズコ くだらない。私達、ちゃんと謝ったじゃないですか？

キョウコ 謝った？ あんたは謝らなかつたじゃない？

カズコ ……。

キョウコ 私、見てたんだから。あんただけは非難めいた目つきを私に向けてた。

カズコ ……。

キョウコ なによ、私達なんて言って、嘘つき。

ダイゴ いや、謝ったんだよ。小さい声だったけど、隣にいた俺にははっきり聞こえたぞ。

キョウコ 口元なんて一ミリも動かなかつたけど。

ダイゴ 口を動かさずに言ったんだよ。

キョウコ なんであのタイミングで腹話術を披露するのよ。

ダイゴ いやいや、ちよつと、ちよつとだけど、口は動いてたんだって。

ヤギ 相手に届かなかつたら言ったことにはならないですよ。

ダイゴ そういうのは性格とか関係性とかあるだろ？

ヤギ あんなに遠慮なく人を非難するくせに？

キョウコ 嫉妬してるんでしょ？ 私とダイちゃんの関係に。

カズコ ……。

キョウコ ダイちゃんとはね、男女を超える友情は存在するかって実験でキスをしたことがある。

カズコ ……。

ダイゴ それ、俺か？

キョウコ ダイちゃんは酔っ払っていたからね。

ダイゴ 酔っ払ってもそんなことはしないよ。

カズコ ……恋人でもないのにキスをしたんですか？

ダイゴ してないって。

カズコ 気持ち悪い。軽蔑します。

キョウコ 実験はある意味失敗。キスだけじゃおさまらなくなっちゃって。

ダイゴ おい！

カズコ ……。

キョウコ お前のキスの仕方はって急に演技論をぶちかましてきたから、とても面倒くさいことになったけど。

カズコ ……。

ダイゴ ……。

カズコ 勘違いされてるようですが、嫉妬なんてしてません。

キョウコ 嘘。

カズコ 私がダイゴさんのことを好きだって誰かが言っていました？

キョウコ 言わなくなたって、あんたの態度がもう分かりやすすぎて。

カズコ 私は他の男性と同じく普通に接しています。

ダイゴ ……。

カズコ ダイゴさん、思わせぶりな態度になっていたのならば謝ります。すみません。俳優

優としては尊敬していますけど、ダイゴさんのこと、なんとも思っていないですから。

ダイゴ ……。

カズコ ……。

ダイゴ ……シン！ ふざけんよ！

シン え？

ダイゴ 研究生の中心が自分だとも思ってたんだろ！ みんながお前についていくって思ってたんだろ！

シン え、あ、え？

ダイゴ 『喜びの琴』は俺とのあんな良い場面があるのにお前はそれでも俳優か！？

チホ シンちゃん、やつあたりされてるね。

ダイゴ うるせえうるせえ！ 上演中止派は黙ってろ！

チホ ……。

ダイゴ 『喜びの琴』は絶対に上演する！ 『喜びの琴』は絶対に上演する！

シン 落ち着けよ。

ダイゴ これが落ち着いていられるか！？ これが落ち着いていられるか！？

シン なんて二回言うんだよ。

ダイゴ アトリエの占拠も終わりだよ！ 扉ぶっ壊してやるよ！

ケイスケ ダイゴさん！

ダイゴ なんだよ！

ケイスケ 僕、いいことを思いました！

ケイスケが袖幕に勢いよく入っていく。

ケイスケ（声） 殺されるー！ 助けてくれー！ ひいひいひい！ 誰かー誰かー！ 助

けてくれー！ やめろー！ やめろー！ 命だけはー！ ああああっ！ ううううう

うううっ！

全員 ……。

ケイスケが袖の壁をしつちやかめつちやかに叩く音が聞こえてくる。

全員 ……。

ケイスケ(声) ♪ ハァー 待ちに待ってた世界の祭り 西の国から東から 北の空から
南の海も越えて日本へどんときた ヨイショコーリヤどんときた オリンピックの晴れ
姿 ソレトントトトント 晴れ姿
全員 ……。

ケイスケが袖から出てくる。

シン ど、どうした？

ケイスケ 時間帯を間違いました、今、大騒ぎしても芝居をやっていると思われてしまう。

シン え？

ケイスケ 世間に訴えればいいと思っただけです。

シン ……。

ケイスケ このままアトリエで深夜まで待つんです。そして世間が寝静まった頃に大騒ぎする、とにかく騒ぐんです。そうしたら近隣の住民が黙っていないでしょう、警察を呼ぶ、騒ぎを聞きつけて新聞記者がくる、その時、研究生全員で「三島を守れ！ 上演賛成！」のシュプレヒコールをやるんです！ 研究生が必死の訴え、三島作品上演への熱き思い、という見出しで新聞記事になって、我々の思いが世間に響く！ そうすれば劇団だって上演賛成に舵を切るはずですよ！

シン ……。

ミノリ なんだよ、けっこうおもしろそうじゃなか。

トオル どこがおもしろいんですか？ そんなの実現すると思ってるんですか？

ミノリ 思ってる。

ケイスケ 「雲」の分裂の時だって新聞記事になるのは早かったじゃないですか？ あの

時と同じで関係者の誰かがもう新聞社に情報を流してると思えますよ。

トオル まだ上演がどうなるか決定してないの？

ケイスケ きっと上演反対派が自分たちの良いように流してる。

トオル そんなわけないだろ。

シン ケイスケ、お前の上演賛成の意志は尊重するけど、俺達はキョウコにひどいことをしてしまった、これは償わなければいけないよ。

ケイスケ でも、上演中止のために立てこもるなんて僕にはできません。

シン キョウコに申し訳ないという気持ちとは別にもうひとつあるんだよ。キョウコを責めた時、俺達は演技ならやれるだろうって言ったんだ、あんな悪ふざけを演技と言い換えてしまった、俳優やってんのにあれが演技だなんて主張したことは、本当に恥ずべきことだよ。

ケイスケ ……。

シン 過ちは一瞬で後悔は一生だって誰かが言ってたけど、その一生の過ちを俺はしてし

まったと思ってる。俳優人生として最悪な演技……じゃなくて悪ふざけか……本音は俺も上演すべきだと思ってるけど、キョウコへのお詫びと自分自身への戒めを込めて、上演反対派で立てこもるっていう選択をみんなすべきだと思うんだよ。みんなはどう思う？

タダヒコ たしかにあの悪ふざけはまずかったよ、シンの言う通り最悪の演技だよ。でもさ、上演反対派になって立てこもるっていうのが解決策だとは思えないんだよ。このまま立てこもってもシンは座員になれるよ絶対。でも、俺はさ、違うだろ？俺がこのまま立てこもり続けたら座員になれないよ。

シン 立てこもったくらいでそんなことにはならないよ。

タダヒコ いやいやいやいや、シンは大丈夫なんだって。やっぱり、キシダ、シンだから。

シン それで俺だけ残ったら、俺も文学座を辞めるよ。

タダヒコ そうならんないためにもさ、もう立てこもるのをやめようよ。今はまだこの状況を加藤さんしか知らないけど、成井さんとか杉村さんとかに伝わったら本当に危うくなるよ。

シン ……。

突然、扉の向こうで扉に何かを打ちつける音がする。全員、音と扉の振動に驚く。

打ちつける音がしばらく続き、扉が壊されるような様子に不安がる。

全員 ……。

打ちつける音が終わると、ドンドンドンドンと扉が叩かれる。

(声) 俺だ！ 加藤だ！ さっきは研究生は関係ないと言って悪かった！ 反省してる！ 上演反対、大いにけっこう！ お前たちの真剣さ、文学座への思いを尊重する！ 存分にやってみるといい！ 俺もお前たちを応援する！

ケイスケが扉の前へ行く。

ケイスケ (扉の向こうに) 加藤さん！ ツルオカです！ 研究生は、

(声) え、誰だって!?

ケイスケ ケイスケです！ ツルオカケイスケです！

(声) 養成所の生徒か!?

ケイスケ 違います！ 二期生です！

(声) もう一度名前を言ってくれるか!?

ケイスケ ツルオカケイスケです！

(声) ……。

ケイスケ ……。

(声) もう一度名前を言ってくれるか!?

ケイスケ ツルオカケイスケです！

(声) ……。
ケイスケ ……。
(声) もう一度名前を言ってくれるか!?
ケイスケ ツルオカケイスケです!

ヤギが扉の前に行く。

ヤギ (扉の向こうに) 加藤さーん!
(声) お、ヤギちゃーん!
ヤギ ケイスケのこと、
(声) ヤギちゃんもいるなら俺も立てこもりたかったよー!
ヤギ ケイスケのこと、覚えて、
(声) 研究生諸君! 明日までがんばってみろー!!
ヤギ 加藤さーん!

声の主からの返事はない。
少しの沈黙。

タダヒコ 「ところがあなたは? あなたは何です? 城の人でもない。村の人でもない。何ものでもない。でも、残念ながら、何ものかではありますがね、要するに、他所もの」
トオル え?
タダヒコ 『城』の台詞。
トオル なんで今言ったんですか?
タダヒコ ケイスケが城の前で立ち尽くすKに見えて…見えない?
トオル いや、別に。
マユミ さっきの大きな音はなんだったの? 扉、壊されるのかと思ったけど。
チホ 私達、閉じ込められたんじゃない?
マユミ え?
ミノリ ちよつとケイスケ、どいて。
ケイスケ ……。

ケイスケは扉から離れる。

ヤギ ……。
ミノリが内側の鍵を開けて、ロープを緩め扉を開けようとするが、開かない。ミノリはさつきよりも強く押すが開かない。思いつきり体で扉を押すがびくともしない。

ミノリ 開かない。
全員 ……。

シン え、開かないの？
ミノリ 開かないよ。

トオルも扉へ行き、ミノリと一緒に扉を押すがまったく動かない。

トオル ……ダメだ。

マユミ 本当に開かないの？ ふざけてるんじゃない？

トオル 開かないです、びくともしない。

ミノリ うん、無理。

マユミ 今夜、撮影なんだけど。

マユミも扉へ行き、押すがやはり動かない。

マユミ ちょっと、トオル、ミノリ。ヤギちゃんも。

マユミとトオルとミノリとヤギが力いっぱい押すが動かない。

マユミ ……。

トオル やっぱりダメですね。

ヤギ 扉が壁になったみたい。

ミノリ さすが加藤さん、あの短時間でこの強度とは。

トオル 舞台美術を立てる時も率先してタタいてましたからね、演出家なのに。

ミノリ 大工の息子だからな。仕込みの時、棟梁みたいだったもんな。

マユミ (扉の向こうに) すみませーん！ オガワですー！

ミノリ おい、やめろよ。

マユミ これから撮影なんだって！

ミノリ 情けないことすんなよ、こうなったら立てこもってやろうぜ。

マユミ それ以上何か言ったら一物いもつじゃなくなるよ。

ミノリ え？

マユミ (躊躇なく股間を膝蹴りしようとする)

ミノリ (動物的な反射神経で無様によける) おわっ！ 俺、何も言ってないだろ！？

マユミ え？ って言った。

ミノリ ……。

マユミ 加藤さーんー！ いらっしやいますかー！ 加藤さーんー！ いらっしやいますかー！

扉の向こう側からは何の返事も無い。

マユミ トオルっ！

トオル え？

マユミ (トオルの股間も躊躇なく膝蹴りしようとする)

トオル (動物的な反射神経で無様によける) なんで!?

マユミ ヤギちゃんっ!

ヤギは危険を察してすでにマユミから遠く離れている。

ヤギ ……。

マユミ (舌打ちする)

トオル 男女関係ないんだ。

マユミ ドラマの監督、すぐに怒鳴ったり当たり散らしてくる人なのよ、今日も寝坊して遅刻してみんなの前で罵倒されて、鼻くそ飛ばしてきたんだよ。

チホ え、それ、当たったの？

マユミ ……。

チホ 嫌な現場ね。やめられないの？

マユミ やめられないでしょ! 劇団からもらってる仕事なんだから。あーもうっ! キ

ヨウコのせいだからね!

キョウコ は? 寝坊したんでしょ? 自業自得でしょ。

マユミ そうよね、自業自得よね。

キョウコ 仕事があるだけいいじゃない。自慢に見えちゃう。

マユミ そう見たいんじゃない?!

キョウコ そう見せないように見せてるんじゃない?!

マユミ キョウコだって帰りたいんじゃないの? お店を手伝わなくっちゃいけないんでしょ?

キョウコ ……。

ヤギ そろそろ混む時間帯ですね、お父様、また倒れちゃうかも。

キョウコ この間はこちらにやくで足を滑らせたせいでよ。

マユミ そんなどうでもいい話、しないでよ!

キョウコ ……。

マユミ ……あ……ごめん……ごめんなさい。

キョウコ ……。

少しの沈黙。

トオル 加藤さん、僕たちを応援してるって言ってたけど、実はそうじゃなくて閉じ込めて懲らしめたいんじゃないですか。

シン 懲らしめたい?

ミノリ あー、研究生風情が調子にのりやがってなにがアトリエ封鎖だバカヤロウ、てめらちったあ反省しろこのポケナスどもがってなことか?

トオル やっぱり研究生に言い返されて腹が立ったんですよ。

ミノリ よくよく考えてみれば扉の向こう側の封鎖って、向こう側にいれば誰でも解除できるともんな。

シン どうしてわざわざあんな風に言ったのかな。

ミノリ 反省しろって直接言うのと、反射的に反抗してくると思ったんだよ、ほら、俺達、若者だから、暴れ始めるかもしれないって。

トオル もしくは、あまりに怒り心頭して演技でもしなければ自分を抑えられなかったのかもかもしれませんね。

シン 後々、俺はひどく怒られるんだろうな。

ミノリ それは間違いないね。

タダヒコ 加藤さんの意見って座員昇格の選考にそんなに影響ないよな？

トオル え、それなりにあるでしょう。

タダヒコ 二期生が知ったような口をきくんじゃないよ。

トオル じゃあ、訊かないでくださいよ。

タダヒコ 俺は影響ないですよって言ってほしかったの。

ミノリ ずっと心配してるな。

タダヒコ 心配するだろ。

ミノリ 余程好きなんだな、文学座が。

タダヒコ ああ、それは認めるよ。実を言えば、ケイスケに共感するところはたくさんあったけど、あんな風に愛を剥き出しにされると……。

ミノリ 俺は気に入らないことがあったらいつでも辞めてやるよって感じだけどな。タダヒコ そういうところ、羨ましいよ。俺はここでクビを切られたらどうしたらいいのか分からない、俳優座、民藝を受け直すっていうのも違うし、雲に行った人たちとは

気が合わない人が多かったし、映画へ行こうにも東宝ニューフェイスっていう顔でもないしな……やっぱり舞台俳優として、文学座の俳優としてやっていきたいよ。ミノリ あんまり心配しすぎると、ダイちゃんみたいになるぞ。

いつの間にか、ダイゴはホールの方でしゃがんでうずくまっている。

カズコ ……。

チホ (カズコに) 気にしない気にしない。

カズコ ……。

チホ カズコさんは男を見る目がある。

カズコ ……。

チホ ああやって人前で落ち込んでみせるのは、女の特権だと思ってたけどね。男がやるようになるとはね。

シン 聞こえるから。

ダイゴ ……。

チホ ダイちゃんはそういうところ、あるのよ。

シン 聞こえるって。

チホ あんな惨めったらしいところ見せつけられてもね、女は微塵もなびいたりしないの

にね。

シン 絶対聞こえてるよ。

チホ 聞こえるように言ってるの。

カズコ ……。

チホ 「コロリンシャン、リロリルシャン」

シン え？

チホ 琴の音。

シン 琴の音？

チホ 『喜びの琴』で絶望した主人公に聴こえてくるんでしょう？

シン ああ。

チホ ダイちゃんのナルシズムに彩りを加えてあげたの。

ダイゴ ……。

シン 「あなたもきこえるんですね、あの琴が。実は僕にもきこえるんです……どうです。

あの澄んだ、静かな、心休まるようなやさしい音楽」

チホ 何、今の？

シン 彩り。『喜びの琴』の台詞、ダイゴの台詞だけど。

ダイゴ ……。

ダイゴはさらに端の方に移動して、その場に座り、顔を膝にうずめる。

チホ そんないじけても誰も何もやってくれないわよ。

シン 攻めすぎ。

チホ 仲良しだから大丈夫よ。

タダヒコはキョウコの前へ行く。

キョウコ ……。

タダヒコ キョウコさん、こんなことをお願いするのは厚かましいにもほどがあるので

が、もうお願いするしかありません。今度、加藤さんが戻ってきたら、すべてキョウコ

さんの自作自演で我々を巻き込んだだけだと言っていただけではないでしょうか。

キョウコ ……。

タダヒコ 僕の俳優としての力があればこんなお願いをすることにはならなかったですし、

僕の人としての判断力があれば、キョウコさんを傷つけることもなかったと思います。

反省しています。とても反省しています。だから、僕のお願いを聞いていただけないで

しょうか。

キョウコ ……。

ミノリ うわっ、恥ずかしくないの、そんなこと言って。

タダヒコ 恥ずかしいよ、でもダイゴ見てたら、ウジウジしても何も変わらないなって

思っ、行動してみた。

ミノリ 行動してはいるけどな、なんかな。

チホ 生き恥をさらすのが俳優よ。

タダヒコ だろ？ 恥は承知で自分の気持ちに正直になってみた。

シン ダイゴも生き恥さらしてるけど？

チホ 嫌だ、ああいうのは。

キヨウコ いいよ。

タダヒコ え。

キヨウコ 加藤さんが戻ってきたら前言撤回するって伝えるよ。全部私の自作自演でみんなは何も悪くない、キャストイングされない腹いせにみんなを巻き込んでしまっただけだって言うよ。他の偉い人がきても、杉村さんがきても、そう伝える。

タダヒコ ……いいの？

キヨウコ いいよ。でも、私もお願いがある、それをやってくれたら、前言撤回するし、全部なかったことにする。

タダヒコ やります。

キヨウコ タダヒコだけじゃなくて、みんなへのお願い。

タダヒコ え。

キヨウコ みんなが聞いてくれないとダメ。

タダヒコ どんなこと？

キヨウコ 上演反対の人は手をあげてってみんなに聞いてもらいたい。そしたら嘘でもいいからみんなに手をあげてもらいたい。それだけ。

全員 ……。

タダヒコ 嘘でもいいの？

キヨウコ 嘘でもいいの。手さえあげてくれれば。それで私はなかったことにする。

タダヒコ 本当に？

キヨウコ うん、でも全員だよ、全員、手をあげてくれればね。

少しの沈黙。

タダヒコ みんな、聞いた？ ただ手をあげるだけだからさ、協力してもらえない？

嘘でもいいんだって、頼むよ、お願い。

少しの沈黙。

タダヒコ じゃあ……上演反対の人は手をあげて。

ヤギとチホは手をあげる。遅れて、シン、トオル、ミノリも手をあげる。

タダヒコ カズコ。

カズコ ……。

タダヒコ 嘘でいいんだから。

カズコ ……。

カズコは手をあげる。

マユミ ……。

マユミも手を上げる。

タダヒコはダイゴのところへ行き、ダイゴの右手を持ち上げて上にあげさせる。

ダイゴ ……。

ダイゴはそのまま腕を上げた状態のままにいる。

ケイスケ 僕は絶対に手をあげません。

キョウコ 僕は絶対に手をあげませんって言いながら手をあげてもらってもいいんだよ。

ケイスケ ……。

キョウコ 僕は上演賛成ですって言いながらでもいいの。

ケイスケ ……。

キョウコ 私はただ手をあげてもらいたいだけ。

ヤギ ケイスケ、嘘でいいんだって。

ケイスケ ……（手をあげながら）僕は絶対に手をあげませんし絶対に上演賛成です。

それぞれが手をあげている時間があって、

キョウコ どうもありがとう。

それぞれのタイミングで手をおろす。

カズコ 満足ですか？

キョウコ 不思議な感じ。なんだか悲しくなっちゃった。

カズコ 私はやってよかった、手をあげてよかったです。

キョウコ え？

カズコ 嘘をついている体があんなにも気持ち悪くむず痒いものだと知りました。そうしたら今、心の中でごまかしている、目を背けているものが細菌のように繁殖をはじめ広がっていき、体中が痒くて仕方ありません。

キョウコ 大丈夫？

カズコ 私の脳内に「こんにちはは、赤ちゃん」が鳴り響いています。「こんにちはは、赤ちゃん」なんて、早く結婚しろよ、すぐに赤ちゃんを産めよ、良き伴侶と幸福な家庭を築けよって女性を煽ってくる悪しき曲だと思っていました。家庭に入ることだけが女性の幸福ではないはずだと、自立を誓い、女優で食べていくと決めた私が、マイホームへの憧れを芽生えさせてしまっている、とても悔しいです。

ダイゴ ……。

カズコ さつきはキョウコさんへの反発もあって思いとは裏腹な素っ気ない言葉で返してしまいました。私は好きになつたら積極的にいく性格なんです。キョウコさんの指摘はまさにその通りで、私は本当に分かりやすいからすぐに伝わってしまいます。皆さんも気づいているでしょう？ 幼少の頃、近所の酒屋のお兄さんに憧れ、ただ見ていただけなのに「ごめんな、俺にはもう決めた人がいるんだ」って一方的に断られたこともあるんです。だから、あの、素直にというか……ああ、しゃべりすぎました……。

全員、ダイゴを見る。ダイゴは顔を膝にうずめる。

ダイゴ (笑っているのか、体が小刻みにふるえる)

チホ 喜んでる。

ダイゴ (顔を膝にうずめたまま) シン。

シン ん？

ダイゴ (顔を膝にうずめたまま) さつきは怒鳴って悪かったよ。疑いよりも信頼だなやっぱり。

シン ……。

ダイゴ (顔を膝にうずめたまま) チホ。

チホ ……。

ダイゴ (顔を膝にうずめたまま) お前はもつと傷つかなきゃいけないよ、そうすれば俺のこの背中から醸し出される哀愁の魅力がお前にも分かるようになるから。

チホ ……。

ダイゴ (顔を膝にうずめたまま) チホ。

チホ また私？

ダイゴ (顔を膝にうずめたまま) お前は人間的にまだまだまだだよ。達観してるような態度を装って傷つかないようにしてるのはお見通しだぜ。俺みたいに挫折を味わつたら俳優としても人間としてももつと成長できるから。

チホ よほどさつきのが悔しかったのね。

ダイゴ (勢いよく立ち上がって) よしつ、どうする！？ 扉、ぶち破っちゃうか！？

このままみんなで立てこもるのも楽しいか！？ 歌でも歌ってな。

チホ もうお腹が限界よ。

タダヒコ 総会のせいで飯食えなかったからな。

チホ お手洗いだってねえ、行きたくないだろうし。

ヤギ ああ！ それは大問題ですよ。

ミノリ どうしようもなくなつたら舞台袖でやるしかないな。

トオル そんなの舞台への冒険ですよ、絶対やっちゃいけない。

ミノリ こっちは閉じ込められてるんだぞ。

マユミ そんなことになる前にどうにかするの！

全員、マユミを見る。

マユミ どうにかしよう！ どうにかしてよ！ お願い！ 私を撮影に行かせてよ！
全員 ……。

マユミ 確かに今日寝坊したけど、もうずっとずっとうまく眠れないのよ。布団に入って
目をつむってもすぐにドラマの監督の顔が浮かんできちゃって、それで起きて台本を何
度も何度も読み返して確認して、それでもまた眠れなくてまた台本を確認してついでに
の撮影が始まってからずっと繰り返ししてる。

全員 ……。

マユミ 今夜がね、最後の撮影なの。なにがなんでもやり遂げたい。それで撮影が終了し
たら、鼻くそを監督にぶつけてやる、首筋のところを狙って、これは絶対にやる、絶対
にやってやる。

全員 ……。

マユミ みなさん、撮影の現場に私を行かせてください。お願いします、お願いします。

少しの沈黙。

ダイゴ これはもう、扉を開けるしかないな。鼻くそぶつけてほしいもんな。

シン うん。

ミノリ ダイちゃん、あれは開かないよ。

ダイゴ ただ押しても仕方がないんだよ、急所を狙わないと。

ダイゴ、ミノリ、トオル、シンは扉の前へ行く。チホは男性陣と一緒にになって扉の
前へ行く。

ダイゴ 力仕事だぞ。

チホ 力じゃないところで女も必要よ。

ケイスケが彼らの前に立ち塞がる。

ケイスケ 僕はまだあきらめていません。

それぞれ、ケイスケを見る。

ケイスケ 立てこもりましょう。

ダイゴ マユミがあんなにせっぱつまってるんだぞ、助けてやらないでどうする？

ケイスケ 僕だっせっぱつまってます。ここで扉を開けるか開けないかで文学座の未来
は変わってくると思います。

ダイゴ いちいち大げさにすんなって。扉を開けられてもお前は残っていいんだから。

ケイスケ 僕が残って、僕なんかひとり残って、誰が意見を聞いてくれますか？

少しの沈黙。

トオル 聞いてくれるまでしつこく話すって言ったじゃん。
ケイスケ ……。

トオル やってみなよ、自分を信じて。
ケイスケ ……。

シン ケイスケ、まず扉を開けてからだよ、それからまたみんなで話そう。
ケイスケ ……。

ダイゴ タダヒコもこいよ。

タダヒコ いや、もうおとなしくしておいた方がいいよ。

ダイゴ マユミが困ってんだぞ。

タダヒコ そのうちに加藤さんが開けてくれるって。

ダイゴ 保身に走りやがって。

タダヒコ 生き残り戦略だよ。

ダイゴは扉を触ったり叩いたりして急所を探すが見つからない。

ダイゴ うわっ、これは、壁だな。

チホ 助走をつけて押してみたら？

ダイゴ ああ、やってみるか。シン、ドアノブを回しといてくれる？

シン うん。

シンがドアノブを回し、ダイゴが少し離れたところから助走をつけて押す。

チホ もっと強く。

ダイゴがさつきより勢いをつけて押す。

チホ 繰り返して。

ダイゴ ああ。

ダイゴは助走をつけて押す、を何度も繰り返す。

トオル どうですか？

ダイゴ 手応えがなくなっているわけではない。

トオル それ流行ってるんですか？

チホ 交代交代、ミノリとトオルちゃん。

ミノリがドアノブを回し、トオルが助走をつけて押す、を何度も繰り返す。

チホ 二人のタイミングが合っていない。
ヤギ ちょっとケイスケ!!

全員、ヤギを見る。と、その先でケイスケがマッチに火をつけて立っている。

全員 ……。

火が消えてケイスケはマッチ箱からもう一本取り出す。

ケイスケ アトリエを燃やします。一人で騒いだって何にもならないし、火事にでもなれば世間の注目を集めて、僕の声も届くはずですよ。皆さんは早く扉を開けて出て行ってください。僕は向こうの隅の方で火をつけてきます。

ケイスケは下手の舞台袖に入っていく。

シン おいおいおいおい。

シンとヤギがケイスケを追いかけて下手の舞台袖に入っていく。

タダヒコ え、え、どうする？

ダイゴ お、俺も行ってくる。

ダイゴも下手の舞台袖へと向かう。

ミノリ あいつ、どうなってんだ。

トオル 仮に火でもつけられたらひとたまりもないですよ。

チホ ほらほら、逃げ場をつくらないと。

ミノリ ああ、おお。

ミノリとトオルは扉に体をぶつける。

舞台袖からシンとダイゴとケイスケが取っ組み合う声や音が聞こえてくる。

ヤギがマッチ箱を持って舞台袖から出てくる。

ヤギを追いかけてケイスケが出てきて、ヤギからマッチ箱を奪おうとするが、取り損ねてマッチ箱とマッチ棒が床に散らばる。ヤギがマッチ箱をすぐに拾い、両手で隠す。シンとダイゴも出てくる。

少しの沈黙。

ケイスケ ……。

ヤギ ケイスケ……笑おう、笑っちゃおうよ。たかぶった気持ちのせいで間違うこともある、そんな自分を笑い飛ばして進んでいくしかないよ、ね、キランキラン。

カズコ 笑えないから！ 火をつけようとしたんだよ、下手したら今頃、私達燃えてる最中だよ！ 燃えてる最中っていう表現は変だけど！
ケイスケ ……。

カズコ 犯罪だよ、殺人だよ、文学座からいなくなっただけじゃない。
ヤギ 実際やってないんだからそんな責めなくたっていいでしょう。

トオル ヤギちゃん、もし火事にでもなったら擁護しないだろ？
ヤギ ……。

トオル どうかしてるよ、アトリエを燃やしてまで上演にこだわる理由なんてない。
ヤギ それはだから言ってたじゃん、文学座の公演を観て人生を救われたって。

トオル 救ってくれた文学座を焼くってどういうことだよ？ 三島さんの『金閣寺』の真似ごと？ 「金閣寺を焼かねばならぬ」ならぬ、文学座を焼かねばならぬってこと？

ヤギ 読んだことないけどそういうこと！
トオル だったら危険すぎるよ！

ヤギ わかったよ！ 謝ればいいの！？ 放火しようとした事実につきましては、本人も認めており、自身の至らなさを痛感している次第でございます、あらためまして関係者の皆様にご心よりお詫びを申し上げます。本当に申し訳ございませんでした。これで満足？
トオル なんだってそんなに庇ってあげるの？

ヤギ だって、今日のケイスケはとっても素敵なんだもん。
カズコ 放火犯が素敵？

ヤギ だから火つけてないじゃん！
カズコ つけようとしたじゃん！

ヤギ おい、てめえ、いいか、耳の穴かっぽじってよく聞けよ。ケイスケが人に聞こえるような声でしゃべるってだけでも感動的なのに、誰にも賛同されなくても自分の意見を主張し続けているんだぞ。火をつけるなんて絶対にやってはいけないことなのはその通り、その通りだよ、でもな、ここでケイスケを非難したら、萎縮してまたおとなしいケイスケに戻るかもしれないねえんだぞ、そんなのかわいそうだろうがよ！

カズコ 貴様はお姉ちゃんなの？ 私は今日のケイスケ君は好きじゃない。おとなしくて何がいけないの？

ヤギ 自分を変えようって奮闘してるんだよ！
カズコ 無理に変える必要なんてない。

ヤギ 無理をしないと変わらんないんだよ、人は。
カズコ ケイスケ君は変わりたいって？ 言ってた？

ヤギ 言っていないけど、伝わった、受け取った。
カズコ そんなの貴様のひとりよがりでしょ。

ヤギ てめえにケイスケの気持ちに分かってたまるかっての。
カズコ 放火犯の気持ちなんて分かるわけないでしょ。

ヤギ てめえはそればかり言うなあ！
トオル 「それでも、お目があるのか？ まさか恋ゆえにとは言えますまい」

ヤギ は？
トオル ハムレットの台詞。

ヤギ もう一回、言ってみなよ。

トオル 「それでも、お目があるのか？ まさか恋ゆえ……」

ケイスケはトオルを突き飛ばす。トオルはすぐにケイスケを突き飛ばし返す。

トオル ……。

ケイスケ ……。

チホがトオルを背後から抱きしめる一歩手前のような感じで両肩をつかむ。

トオル ……。

チホ マツチ棒、踏んじゅうから。

トオル ……あ。

チホ もつたないじゃない。

チホはマツチ棒を拾い始める。

チホ 熱くなれて羨ましいわよ、嫌味じゃないよ、私はどこか冷めている自分がいつもいて、のめり込もうとするのを抑えちゃう。ケイスケくんも同じだと思ってたのよ。

ケイスケ ……。

チホ 私、稽古場の隅っこの方にいる人をついつい観察しちゃうんだけど、あなたも静かに周りを観察してて、私と何度か目が合ったよね。その時、ああって思ったのよ。

ケイスケ ……。

チホ 無理してない？ 大丈夫？

ケイスケ ……。

突然、外からドンドンドンと扉が叩かれる。

(声) おーい、研究生！ 立てこもってるかー！

全員 ……。

(声) お前たちには朗報だ！ 今、戌井さんから電話があつてな！ 三島さんとの話し合いは決裂！ 三島さんは上演の保留を認めず、戯曲を引き上げるそうだ！ つまり！ 上演は中止！ 三島さんも退座することになった！

全員 ……。

(声) お前たちの主張が通つたな！ なかなかやるなあ！ まあ、お前たちが立てこもってるのを知ってるのは俺だけだな！

全員 ……。

キョウコ 加藤さん！

(声) 悪いな！ 急いでるんだ！ 戌井さんにすぐに家に来いって言われたんだよ！ あ、そうだ！

キョウコ 加藤さん、キョウコです！

(声) ツルオカって思い出したよ！ ごめん！ 仕込みの時に手伝いに来てくれた学生劇団の高橋英樹似の、な！ なんてお前がそこにいるんだよ(笑)！ まあいいや！ お前も早く帰れよ！

キョウコ 加藤さん！ 加藤さん！

マユミ 加藤さん加藤さん！ 扉！ 扉、開けて行ってください！ 加藤さん加藤さん！

声の主は去っていったようだ。

マユミ ……。

キョウコ ……。

少しの沈黙。

キョウコ タダヒコ、ごめん、いつ扉が開くか分かんないけど、その時に、ちゃんと言うから。

タダヒコ それどころじゃないよ。

キョウコ え？

タダヒコ 上演中止だって、上演中止だぞ……本当に三島さん辞めちゃうんだな。これって他にも辞める人たくさん出てくるぞ、え、大丈夫か、文学座、本当にこれ、解散があり得る話だぞ。俺たちの出演機会が増えるって期待してたけど、実際、本当になると、それどころじゃないな、本当に解散しちゃうんじゃないの。

全員 ……。

タダヒコ あれ、俺ひとりで喋ってるけど？ どうした？ 三島さんが辞めちゃうんだぞ。シン うん、そうなんだけど、まだこっちはこっちで決着が……。

タダヒコ ああ……。ケイスケ、上演中止だよ、もうどうにもならないよ。あきらめろ。

ケイスケ (小声で) ……そうですね。

タダヒコ え、なに？

ケイスケ (小声で) そうですね。

タダヒコ え、え、なに？ なに？

ケイスケ (小声で) そうですね。

タダヒコ なんだって？

ダイゴ そうですね、だって。

タダヒコ ……ああ、そう。

ダイゴ 意外にあきらめがいいんだな。

タダヒコ うん、上演中止を撤回するまで立てこもるって言うと思った。

ダイゴ ケイスケ、本当にあきらめたのか？

ケイスケ (小声で) はい……。

タダヒコ え？

ダイゴ はい、だってよ。

タダヒコ そうか、あきらめちゃうのか……あきらめろって言った俺が言うのもあれだけ
ど、あきらめない方がいいんじゃないの？

ケイスケ ……。

タダヒコ お前には最後まで立てこもるっていう選択をしてもらいたいなあ。

ケイスケ ……。

タダヒコ 俺も立てこもろうかな、上演中止と聞いて沸々となんか……やっぱり上演しな
きゃダメだろ！ うん！ やるべきだよ！ よしっ、立てこもろう！ ってすでに立て
こもってるけど、いつか誰かが開けてくれたとしても、俺は立てこもる、ケイスケ、俺
もやるぞ！

キョウコ 座員になれないってぐちぐち言ってたけどいいの？

タダヒコ そういうウジウジした気持ちか逆に俺を座員に押し上げないんじゃないかって
気がしてる。

ダイゴ 裏切ったな。

タダヒコ 裏切るも何もダイゴだって上演賛成派だろ？ お前が主役の舞台が中止になる

んだぞ、いいの？

ダイゴ ……。

ミノリ そうだよ、ダイちゃんの出世作になるかもしれないんだから。

ダイゴ でも、マユミが。

マユミ 扉を開けないと一物が一物じゃなくなるよ。

タダヒコ 一物が一物じゃなくなったらそれが俺の個性だよ。

マユミ 開き直った。

タダヒコ 上演しないと文学座がなくなる、この先のことを考えたって外部からどうのこ
うの言われたら、すぐに上演中止しなくちゃいけないよ。ここは踏ん張りどころだ
よ、ケイスケ、がんばろうぜ。

ケイスケ (小声で) ……僕は。

タダヒコ さっきから急に声どうした？ 上演中止になったシヨックのせいかな？

ヤギ ケイスケ戻っちゃった、あーあ、タオルとてめえのせいだこれ、あんたたちどうす
んのこれ。

カズコ 私たちのせいじゃないから。

タダヒコ 戻った？

ヤギ はい、いつものケイスケに戻っちゃいました。

ケイスケ ……。

タダヒコ そうか、そうだよな、普段はこんな感じだったもんな。

ケイスケ (小声で) 僕は立てこもりません。

ダイゴ 僕は立てこもりません、だって。

タダヒコ あきらめんなよ、立てこもろうぜ、覆してやろうぜ。

ケイスケ (小声で) 皆さんには謝らなければいけません。

タダヒコ え？

ダイゴ 皆さんには謝らなければいけません。

タダヒコ は？

ケイスケ (小声で) 皆さん、すみませんでした……。

ダイゴ 皆さん、すみま……おいおい、俺は通訳か。もっと大きな声で言えよ。

ケイスケ (ちよつと声が大きくなって) 本当は上演賛成派じゃないんです。

タダヒコ え？

ケイスケ (ちよつと声が大きくなって) 上演賛成派じゃないんです、上演はいつでもよくて……。

タダヒコ 上演はどうでもいいって言った？

ケイスケ (小声で) はい……演じていたんです……。

タダヒコ え、なんて言った？

ケイスケ (ちよつと声が大きくなって) 総会が終わって研究生だけになってから、ずっと演じていたんです。

少しの沈黙。

タダヒコ ……え、どういうこと？

それぞれ、ケイスケの言っていることに理解が追いつかない。

ケイスケ (ちよつと小声で) だから、演じてたんです。

シン 演じるってなにを演じてたの？

ケイスケ (ちよつと小声で) 上演賛成派を演じてたんです……。

ヤギ ケイスケ、大丈夫？

ケイスケ (ちよつと小声で) 大丈夫。

ヤギ え、え、え、本当に演技してたの？ 嘘でしょ？

ケイスケ (ちよつと小声で) 嘘じゃないんだけど。

ヤギ 演技じゃなくて、自分を変えようって奮い立たせてたんでしょ？

ケイスケ (ちよつと小声で) ……自分を変えようなんてことは別に……。

少しの沈黙。

ヤギ 本当に？

ケイスケ (ちよつと小声で) 本当に。

ヤギ 本当に本当？

ケイスケ (ちよつと小声で) 本当に本当。

ヤギ 本当に本当に本当？

ケイスケ (ちよつと小声で) 本当に本当に本当。

ヤギ ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 皆さん、すみませんでした。

それぞれ、まだケイスケの言っていることに理解が追いつかない。

ケイスケ (ちよつと小声で) ……なんでそんなことをって思いますよね? 当然だと思
います。自分の演技力を試したかったんです。僕と皆さんとは何が違うんだって。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 僕はこれまでに一度もキャストイングされたことがありま
せん。『トスカ』『調理場』『雨空』『萩すすき』、今回の『城』、そして、『喜びの琴』。テ
レビドラマや映画のオーディションの話ですら回してもらえない。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 努力を怠ったわけではないんです。毎日発声練習は欠かさ
ず、ダイゴさんが言っていた自己観察もやり、古今東西の戯曲を読んで人物の造形を考え
たり、アトリエに誰もいない時にはこっそり台詞の練習をしましたから。捨てる神あ
れば拾う神ありっていう言葉を狭い部屋の壁に貼ってもいるんです。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 『喜びの琴』は決定的でした。演出の松浦さんに今回は座内
の男総動員だからようやくお前にも出番がきたぞって言われて、僕は舞い上がりまし
た。どんな小さな役でも台詞がひとつやふたつしかなくても、色々な演技のパターンを考え
て、相手役との関係性を意識して、三島さんの言葉をしゃべれることに感謝して、やっ
てやるうと思っていたんです。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) でも、配役発表の掲示板を見て愕然としました。ないん
です、僕の名前が。配役表を隅から隅まで探しても僕の名前がない。書き忘れただけかも
しれないと翌日見ても、変わらず僕の名前はなかったんです。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 僕は文学座の舞台に立ってないようです。もう諦めて文学座
を辞めることにしました。今日の総会の後に言いにくいこうと思っていたんです。そうし
たら、総会の再現をマユミさんに見せてあげたいからと誘われ、北村さんの役をやるこ
とになって、初めて自分の演技に手応えを感じた、それで最後の最後に、皆さん相手に
自分を試してみたくなくて、上演賛成派を演じたんです。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 演じていくうちに、自分が『喜びの琴』を上演したくてた
まらない人間だったように思えてきました。演技なのか演技じゃないのか、分からな
くなった瞬間が何度もあって、とても楽しかった。何より皆さんが誰も僕の演技を信じ
て疑わないことが嬉しかったです。さすがに火をつけるつもりはありませんでしたけ
ど、誰かが止めにきてくれると信じてましたから、あんな大胆なことをやれたんです。

全員 ……。

ケイスケ (ちよつと小声で) 朝まで立てこもるつもりでしたけど…ヤギちゃんに申し
訳なくて…。

ヤギ ……。

ケイスケ チホさんにも、無理してないって訊かれて…。

シン 分かってたの?

チホ 分かってるわけじゃない。
シン え、怒ってる？
チホ 怒ってるよ、だまされちゃったんだから。
シン ……。

長い沈黙。

タダヒコ ……なんだ、この……言葉の出ない感じ。これまで色々揺れ動いた俺の気持ちまでもが全部嘘みたいに思えてくる。

ケイスケ (小声で) すみません。

タダヒコ 謝るならやるんじゃないよ。

マユミ 自分の知らぬ間にひと芝居やらされたみたい。私たちのこと、心の中で笑ってたんでしよう？ ひっかかったひっかかったって。

ケイスケ ……。

マユミ 今のその感じも演技してるように思えてきちゃう。

ケイスケ ……。

ミノリ あー、悔しいなあ、お前の演技に気づけなかったのか俺、えーそうかー、相当うまくやりやがったなあ……おい、負け惜しみじゃないけど、お前の演技は演技じゃないからな、勘違いするなよ、芝居の演技はお客さんが演技してるって分かってる上で演技するから難しいんだよ、まったく負け惜しみじゃないけど、俺たちはお前が演技してるって知らなかった、お前は演技はしたけど芝居の演技はしてないからな、それに台本もないしな、他人の書いた言葉をしゃべるってこれが難しいんだ一番、負け惜しみじゃないからな。

ケイスケ ……。

キョウコ ヤギちゃんがかわいそう。あんなに必死になってさ、あんたを擁護してくれたんだよ。

ケイスケ ……。

ヤギ 私、全然平気です。

キョウコ 意地っ張り。

ヤギ いいえ。全然平気です。全然平気ですから、まったく傷ついています。いや、傷ついています。だから笑えません。いや、笑えます。ほら、笑ってるでしょう？ ほら、ほら、まぶしい笑顔が溢れてないでしょう？

ヤギは無理矢理に笑顔を作ろうとする。

シン ヤギちゃん、般若のようだよ。

ヤギ (般若の表情から徐々に仏のように穏やかになるが不意に般若に戻る)

カズコ なんなの？

ヤギ 人間。

カズコ 般若でしょ。

ヤギ ほつといてよ。

ダイゴ 俺たちのせいだな。

シン なにが？

ダイゴ ケイスケが演技しちゃったのって、辿っていくと俺達のせいなんだよ。

トオル そんなことないでしょう。

ダイゴ いや、だってさ、『喜びの琴』の配役表を見た時、ケイスケの名前がないことに誰も気がつかなかったんだから。

シン・タダヒコ・ミノリ・トオル ……。

ダイゴ 男はみんな出るって聞いてただろ？

シン 聞いてたな。

ダイゴ たぶん、ケイスケの演技力どうのじゃなくて単純に三島さんに男性俳優のリストを渡した人が、ケイスケの名前を書き忘れただけだと思うんだよ。だから早く気がついておけば三島さんもケイスケの役を書き加えてくれたと思う。松浦さんもひどいよ、期待させておいて、ひと言、三島さんに言ってくれば良かったのに、でもまあ、すぐにゴタゴタしちゃったからなあ。

シン・タダヒコ・ミノリ・トオル ……。

ダイゴ 俺達相手に演技をしてケイスケは楽しかったって言ってたけど、そうは思わないんだよな。誰も演技していない中で、たったひとり自分だけ演技するってこんなに孤独なことはないだろ。

全員 ……。

ダイゴ トオルはさ、最初に配役表が張り出された時に、気がついてたんじゃないの？

トオル ……。

シン そうなると、トオルが悪いみたいになっちゃうぞ。

ダイゴ ああ、そっか。

トオル 僕は気がついてましたよ。むしろ、自分の配役よりも先に気づいた。

ダイゴ ……。

トオル ケイスケ君は自分で言いに行くと思いました。でも、それをしなかった、演技に對する情熱はその程度なんだと思いました。

ダイゴ ……ケイスケの性格で言いに行けると思った？

トオル ……。

ダイゴ 俺はトオルのせいにしたんじゃないぞ。俺たちの誰かが指摘できてればって…。

トオル 松浦さんには言いに行きましたよ。ケイスケ君がキャストイングされてないって。

ダイゴ え。

トオル 松浦さんは、「気がつかなかったよ、ありがとう」と僕に言いましたけどね、その後、配られた台本にはケイスケ君の名前はなくて…。

ケイスケ ……。

トオル もう一度言うべきだったのかな…。

ミノリ・シン・タダヒコ・ダイゴ ……。

ダイゴ トオル、悪かったな。

トオル ……。

少しの沈黙。

ダイゴ ケイスケ、ごめんな。
ケイスケ ……。

少しの沈黙。

キョウコ ねえ、文学座に人生を救われたっていうのも嘘なの？

ケイスケ ……。

ヤギ あれは本当でしょ？ 前に同じことを私に話してくれたじゃん。

ケイスケ ……。

ヤギ 私、覚えてるよ。おばあちゃんが口にした同じ言葉を布引けいがしゃべってたって。

ケイスケ ……。

ヤギ 本当に辞めちゃうの？

ケイスケ ……。

チホ 辞めない方がいいよ。

ケイスケ ……。

チホ 憤りが通り過ぎたらなんだか感心しちゃった。すごいことよ、誰も気がつかなかったんだから。

ケイスケ ……。

沈黙。

マユミ ああ、もう、疲れちゃった、帰りたい。撮影なんかどうでもよくなってきちゃった。

タダヒコ 俺も帰りたいよ、腹へったし。

ダイゴ さっきの意気込みは？

タダヒコ ちよっともう考えられなくなった。

ダイゴ まあ、こんな感じで立てこもってもな。

タダヒコ ああ。

ダイゴ 扉、どうにかならないかな。

ミノリ マッチあるから燃やす？

ダイゴ やってみるか。

キョウコ 絶対ダメでしょ。

ミノリ 扉、燃やすだけだよ。

キョウコ 扉だけで収まるわけじゃないじゃん。

ダイゴ ちよっとやってみようよ、すぐ消すから。

キョウコ さっき火が原因で言い争ってたの見てた？ 聞いてた？

ダイゴ あ。
カズコ (ダイゴを睨んでいる)
ダイゴ ……。
マユミ やっぱりみんなで大声挙げて外に助けを求めるしかないんじゃない。
タダヒコ それはケイスケが言ってたやつだよ、芝居をやっているとされるって。
マユミ ああ、虚構と現実。
トオル どうしようもないですね。
タダヒコ どうしようもないよほんとに。

それぞれ、腰を下ろす。
長い沈黙。

シン こうやって加藤さんが帰ってくるのを待つのか。

それぞれのタイミングで扉を見る。以降のシーンはしばらくそれぞれ扉を見ながら。

ダイゴ 『カトーを待ちながら』だな。

シン 他の人が来たら面倒だな。

ダイゴ 杉村さんが来たらどうする？

シン 加藤さんに閉じ込められたって言う。

ダイゴ 俺も言う。

キョウコ 私も。

トオル 僕も。

タダヒコ 『城』のラストシーンもこんな感じじゃない？ いつ入れてもらえるか分から

ない城の前でKはひたすら待ち続けるんだから。

チホ あの扉の向こうに城があるのね。

タダヒコ あるよ、城が。

マユミ 城に何があるの？

トオル 希望じゃないですか、希望。

マユミ ああ、希望ね。

チホ 幸福は？

マユミ 幸福もあるんじゃない。

シン 自由もありそう。

マユミ 自由もね、あるね、あの扉の向こうに。

ダイゴ 扉が開いたら、みんなで自由に向かって駆けて行くんだな。

キョウコ 自由なんて不安だよ。

カズコ 私も怖いですが、すぐにここへ戻ってくると思います。

タダヒコ 俺も戻っちゃうな、戻ってこれたらいいけど。

カズコ 戻れますよ、きっと。

ミノリ 大きさだよ、城なんてないよ、あるのは、いつもの見慣れた風景、ロビー、机、

椅子、下駄箱、玄関、ドア、アプローチ、道。

シン 今日もそこ通ってきたなあ。こんなことになるとも知らず、道、アプローチ、ドア、玄関、下駄箱、椅子、机、ロビー、扉、客席、舞台。

キョウコ 「誰が選んでくれたのでもない、自分で選んで歩き出した道ですもの。間違いと知ったら自分で間違いでないようにしなくちゃ」

マユミ ……どうしたの？

キョウコ え、いや、流れるのに、客席、舞台ってきたから次は俳優、それで台詞だなんて思ったら、言っちゃった。

マユミ その台詞、いつも練習してるもんね。

キョウコ ……。

少しの沈黙。

ヤギ ケイスケ。

ケイスケ ……。

ヤギ ケイスケ、ケイスケ、ケイスケ、ケイスケ！

ケイスケ ……え？

ヤギ 聞こえてる？ 聞こえてる？ 聞こえてる？

ケイスケ 聞こえてる……。

ヤギ 私がああ扉を開けることができたなら、文学座、辞めないでね。

ケイスケ ……。

ヤギ 約束してくれる？

ケイスケ ……。

ヤギ 返事がないということは約束したと見なします。

ケイスケ ……。

ヤギは扉の前へ行く。

ヤギ よいしょっ！

ヤギは勢いよく扉を押し始める。扉はびくともしない。それぞれ、しばらくヤギの様子を見ていたが、ひとり、またひとりと、扉へ行き交代しながら扉を押し始める。

ケイスケを残して、全員、扉の前に集まって行く。

マユミ ダイちゃん、これさ、縦二列になってさ、みんなで一斉に押ししてみない？

ダイゴ 俺もそれ言おうと思ってた。

タダヒコ 一番前の人がキツいな。

トオル 僕やります。

ダイゴ うん、男が一番前がいいな、もう一人は俺が。

チホ 私やる。

ダイゴ え？

チホ 大丈夫よ、押しどころを知ってるのよ。

ダイゴ 大丈夫かな？

チホ 大丈夫よ大丈夫、ほらほら。

ダイゴ ああ、じゃあ……せーのっ！

扉を押す。

チホ 痛い痛い！ 押しすぎ！ もうちよつと手加減しなさいよ。

ダイゴ だから先頭はキツいつて。

チホ シンちゃん、代わって。

シン ああ……。

シンとチホが入れ替わって再び押す。何度か押す。次第に息が切れてくる。

シン (息が切れている) ケイスケ、俺と代わってくれろ？

ケイスケ ……え。

シン (息が切れている) 疲れちゃったから。

ケイスケ いや、でも……。

シン (息が切れている) 芝居だったらケイスケが最後に加わって扉が開くっていうエン

ディングになるはずだから。

ケイスケ ……。

それぞれ、呼吸が荒い状態でケイスケを見てうなずく。

ケイスケが列に加わる。そして、押す。扉は動かない。

シンは休んでいる。

ミノリ (呼吸が荒い) シンちゃん、休んでないで押してよ。

タダヒコ (呼吸が荒い) サボってんじゃないよ。

ダイゴ (呼吸が荒い) ほら、シン。

シン ああ……。

シンが加わって、みんなで扉を押すが開かない。

ヤギ (呼吸が荒い) 笑顔でいきましよう笑顔で。

研究生たちはあきらめずに扉を押し続ける。

と、少しだけ扉が動く。さらに扉を押し続ける。扉が少しずつ少しずつ動いていき、

そして、扉が完全に開く。

全員 ……。

扉が開いた充足感と一抹の寂しさを感ずるような時間が流れる。
誰も出て行こうとしなかったが、不意にケイスケが出て行こうとする。

全員（ケイスケ以外） ……。

ヤギがケイスケの腕をつかむ。

ヤギ ……キラッキラッ。

ケイスケ ……。

全員 ……。

研究生たちはケイスケを見つめている。ケイスケが振り向いたところで……。

終わり

主な参考文献、並びに引用

- 『文学座五十年史』 文学座
『女優の一生』 杉村春子 小山祐史 白水社
『芝居の道 文学座と共に六十年』 戌井市郎 芸団協出版部
『回想の文学座』 北見治一 中公新書
『すべての道は役者に通ず』 春日太一 小学館
『女の一生』 森本薫 ゴマブックス株式会社
『若人よ蘇れ・黒蜥蜴 他一篇』 三島由紀夫 岩波文庫
『城』（戯曲） 安堂信也・加藤新吉訳 文学座アトリエ上演台本
『ハムレット』 シェイクスピア 福田恒存訳 新潮社
『文学座通信』 文学座
『悲劇喜劇』 早川書房
『新劇』 白水社
『テアトロ』 カモミール社
『週刊サンケイ』 サンケイ新聞出版局